

Japan Society of
the Graded Direct Method
and Basic English

No. 67

Year Book

2015年6月

発行：GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会 編集：伊達民和

東日本支部 〒226-0005 神奈川県横浜市緑区竹山3-1-8-3102-233 加藤准子方 Tel/Fax：045-934-8314

西日本支部 〒567-0034 茨木市中穂積1-5-B-605 此枝洋子方 Tel：080-8167-1993

<http://www.gdm-japan.net/>

巻 頭 言

2020年のオリンピックが日本で開催と決まったので、文科省は、今度こそは本腰を入れて英語教育を「役に立つ」ものに改善し、それを入試問題にも反映する方向で進めているようだ。それにしても、外国人相撲力士の日本語会話の上達は驚異的である。しかし、彼らは、朝から晩まで日本語漬けになり、日本語を覚えるかどうかには、相撲人生と生活そのものがかかっている。一方、中・高での英語の年間授業時数を平均100時間として6年間では約600時間である。これは日常生活の25日分にしかない。オーラル能力の重要さは理解できるが、限られた授業時間では、優先順位がある。オーラルに偏重すると、英語力の屋台骨である読む・書く能力がつかない。それどころか、読む・書く力がつけば、それも「役に立って」いるはずである。インターネットや電子メールの時代では、文法知識に裏付けられた読み・書きの力のほうが重要である。その点、GDMでは4技能のバランスがとれた授業が実践されている。

センター試験受験者の英語学力は、オーラル重視の学習指導要領（1994年から施行）のもとで学習した高校生が受験した最初の年（1997年）から以降、急落しているという報告がJACET（2009年7月12日大阪大学）でなされた。今や、指導要領の「授業は英語で行う」は絵に書いた餅であり、ESLとEFLが混同されている。GDMとは次元の違う話である。

内 容

巻頭言	伊達 民和	1
Book IIを終えたGDM学習者へのアンケート結果とGDM理論	松川 和子	2
教科書の苦手とGDMの得意—関係代名詞の指導から—	松浦 克己	5
火曜会のこと	唐木田照代	13
火曜会メンバーからの実践報告	(複数執筆者)	13
授業で使う写真について考える	黒瀬 るみ	19
授業レポート「耳なし芳一」大人のクラス奮戦記	石井 恵子	21
GDMの授業と写真	麻田 暁枝	23
DVDをお奨めします	山崎 典子	24
Basic / Wider Basic と Ernest Hemingway の作品言語	後藤 寛	25
活動報告（東日本支部&西日本支部）		41
編集後記		44

Book II を終えた GDM 学習者へのアンケート結果と GDM 理論

松川和子

(1) アンケートの実施

現在、大阪で Book II の成人クラスを教えているが、巻末の A Second Workbook of English も終盤となり、その後は Book II のテキストから離れて、Reading の授業へ進む予定である。

Book II までの授業を振り返り、学習者の「GDM 学習の自己評価」を調査するべく、アンケートを実施した。学習者自身は英語の力は伸びたと認識できているのか？認識できているとすれば、どのような点で成長したと考えられるか、記述式のアンケートを行い、全員（a～h）から回答を得た。

(2) 回答者の GDM 学習履歴

8 名いずれもが Book I から学習を始め、5 年（週 1 回 90 分）以上の GDM 学習経験がある。2014 年 9 月に Book II p.156 を終え、10 月から巻末の A Second Workbook of English に入っている。この Workbook は解答が用意されているので、問題部分は学習者の自習に任せ、主に story のページを学んでいる（これまでに 6 話を終了）。長いものでは 2～3 ページにわたるので一回の授業では時間が足らず、2～3 回に分けて学習する。準備段階ではトピックが身近で導入項目が含まれている新たな story を用意し、抵抗なく課題の story に入っていけるよう工夫した（これまでにそれぞれ A4 1 枚前後の長さの 7 話を作成）。

(3) アンケートの設問と回答（原文のまま、下線部筆者）

設問①学校で学んだ英語と GDM による英語学習の違いは？思いつくままにいくつか書いてください。

設問② GDM による英語学習で何か変化がありましたか？思いつくままに書いてください。

- a. ①実用的でそのうちしゃべれるようになる気がします。
②知っている最小限度の単語でかなりむづかしい事が言えるのがすごい。
- b. ①絵と耳に入った英語を日本語に訳さず理解できるように努力したい。
②聞いた英会話をそのまま理解するように近づけていきたい。
- c. ①学校で学んだ英語は長い時間が経過しておりますので今の私は GDM の学習を 5 年近く習った為あまり違いがわかりません。
② GDM は絵を見ての勉強だったので今では文章を読んだりするとその時の状況が浮かんでくる様になりました。また、文法もしっかりとはいきませんが、これはどの様に話せば良いか考えることが出来ます。
- d. ①学校ではただただ暗記するのみでテストが終われば忘れてしまいます。GDM では先生の言葉が表情・動作と一体になっているので感覚として分かるように思います。
②目の前で実際に英語を話している人を見ることで、英語に対する距離間が縮まりました。基本的な動詞の持つ多様性に驚きました。特に get の意味するところを知ってうれしいです。

- e. ①単語の多さでしょうか。take, get... など。これほど使えるんだと知りました。
 ②指導していただいた中でなんとか話していこうと思うようになりました。
- f. ①学生時代は繰り返し口にして、覚えこむことだけが常だった英語の勉強法でした。
 今は教科書や先生の手書かれた文章から自分なりに法則を見つけるに精一杯で、まだ
 応用文まで作ったりできませんが、学生時代よりとても楽しいです。
 ②難しい単語を使わずとも、知っている基本 + a で充分文章を作ることが出来るので、
 GDM に親しみを感じるようになりました。
- g. ①日本語を使わずに、説明（解説）をされるので感覚で理解できる。先生→生徒への
 一方的な授業ではなく、先生←生徒。
 ②英語に対する苦手意識が無くなった。人前で話す事に慣れた。海外に行った時に、
 簡単な言葉が自然に口から出る様になった。
- h. ①文法を重視し日本語の文体に直して読解していたので、英文の内容がイメージ出来
 なくてヒアリング、会話が苦手だった。
 ②今までよく使っていた動詞をイメージして使えるようになった。読みながら内容が
半分以上わかるようになった。

(4) 回答の分析

上記の回答をすこし詳しく見てみよう。a の回答にある『実用的』とは何を指すものか。

一般的な「英会話教室」のテキストによくある、「駅で」「店で」といった非常に範囲の表現
 を覚える意味の『実用的』ではない。English Through Pictures BI および BII で取り扱うトピッ
 クは広範囲・多岐にわたる。Book I では、「動作」「位置」「時」「分類」「状態」などの表現を、
 また Book II では「物理」「働き」「天体」「気候」「交通」「発明」「美」「習慣」など社会生活
 から地球環境などの表現を「最大限に役に立つ単語」（注 Book I 巻頭「初心者への提案」I. A.
 Richards のことば）約 300 語（Book I）プラス 400 語（Book II）計 750 語で「正確」に受信・
 発信できる力を養う意味の「実用的」である。a の回答者は 2 の質問に「知っている最小限度
 の単語でかなり難しい事が言えるのがすごい」。回答者 d は「基本的な動詞の多様性に驚く」。
 回答者 e は「take, get… など、これほど使えるんだと知りました。」回答者 f は「難しい単語
 を使わずとも、知っている基本 + a で充分文章を作ることができるので。。。」と答えている。

また、注目すべきは回答の中に「感覚」「イメージ」などのことばである。回答者 c は「…
 今では文章を読んだりするとその時の状況が浮かんでくるようになった」。また、回答者 d は
 「GDM では先生の言葉が表情・動作と一体になっているので感覚として分かるように思う」。
 回答者 g は「日本語を使わずに説明（解説）をされるので感覚で理解できる。」

回答者 h は「今までよく使っていた動詞をイメージして使えるようになった。」

以上の回答から読み取れることは以下の 3 点に集約できると思う。

1. GDM で学ぶことで、全く使えなかった英語が、学習者の手になじむ、親しみのある道具
 になってきた。
2. この道具は使いやすく、しかも優秀。
3. 英語が感覚的に分かる。英語でイメージできるようになってきた。

(5) GDMは3モードで学ぶフェアな学習法

片桐ユズルさんは最新著書『基礎英語の教え方』(松柏社 2014)でオグデンとリチャーズ, ジェローム・ブルーナー等を引き合いに出し, 3モードで学ぶことの重要性和それこそがフェアな言語学習なのだと述べている:

じつは context には3種類あって, 「文脈」はそのうちのひとつにすぎない。あとふたつは心理的コンテキストと物理的コンテキストである。(中略) オグデンとリチャーズの「意味の三角形」のそれぞれの頂点に対応して, シンボル相互間の文脈, 心理的ながれの前後関係, 関連する物理的状況がある。普通に言語教育で行われていることは, ことばの使われる「文脈」の説明にほとんど終始している。これは言語コミュニケーションの3側面のひとつでしかない。(中略) 角度をすこしずらせて見ると, わたしたちは筋肉感覚的に物理的にできごとを経験し, それをイメージ化して心理の流れに入れ, 言語とかシンボルの形にする, この3つのモードがそろって, はじめてほんとうの理解が起こる, とジェローム・ブルーナーの認知心理学では説明した。(p.131 ~ p.132)

ことばは, それが話される状況を知らないと意味がわからない。状況を知らないひとにとっては, 秘密の暗号でしゃべられているようなもので, ことばとは卑怯なものである。ことばとか記号の意味とは, “the missing parts of the context” (コンテキストのうちの見えていない部分) というリチャーズの有名な定義がある。たとえば, だれかが, “It” と発言したとして, それだけで何のことかわからない。しかし話し手が何を指しているかがわかれば, それが意味なのだ。あるいは先生は指さしているが, 何もいってくれない。生徒が先生のゼロ発言を補って “It” と言えば, それが先生が意味していたことだ。Direct Method においては, このように状況がまる見えであることにより, ことばの卑怯なところが少なく, よりフェアであると言える。(p.138)

(6) まとめ

常に3つのコンテキストを大切にフェアな状況で言語を学ぶ GDM のような学習法こそが学習者を成長させる。そしてそのような成長の自覚が学習者を次のステップへと誘うのだ。

教科書の苦手と GDM の得意

—関係代名詞の指導から—

松 浦 克 己

はじめに

GDM に会って 23 年になるが、その数年前に『日本人の英語』（マーク・ピーターセン著）を読み、当時は教科書を使い、どうやってその内容を定着させるかに四苦八苦していた私は、次の内容をとても興味深く読んだことを今でも強く覚えている。

私が見てきたかぎりの日本人の英文のミスの中で、意志伝達上大きな障害と思われるものを大別し、重要なものから順に取り上げてみると、次のようになる。

- 1 冠詞と数, a, the, 複数, 単数などの意識の問題・・・
- 2 前置詞句・・・
- 3 Tense, 文法の時制・・・
- 4 関係代名詞・・・
- 5 受動態・・・
- 6 論理関係を表す言葉・・・ (注)

この上位 5 項目は、すべて中学校の学習内容であり、そのどれもがふだん教えていて、理解や定着が悪く、どうやって教えればいいのか悩んでいたことばかりであった。教科書で(正確には、教科書だけで)教えることが当たり前と思って指導していた私は、このことが日本人全体の傾向であるなら、私の授業だけの問題ではないなあということを知った。しかし目の前の理解できていない生徒を見ると、「何とかしなくては」とか「どう工夫をすればいいのか」と思うものの、すぐにいい方法が見つかるわけもなく、いろいろ試行錯誤をしていた。そういった時に GDM を知り、自分が理解した範囲で、授業に取り入れていった。そしてそれを少しずつ増やしていくなかで、「日本人の英語」で指摘されていた 5 つの項目をはじめ、自分が教えづらい、わからせづらいと感じていたことの多くが、GDM を活用すると、それまでとは違い生徒が自然に納得する表情が多く見られるようになった。それをねらって、あるいはそうなるであろうという確信に近い思いを持って取り入れたのだが、あらためてその効果の大きさにとても驚いた。

注『日本人の英語』（岩波新書）7 & 8 ページより抜粋

1 教科書と GDM の根本的な違い

GDM の特徴である「説明をしない」ということから、生徒は自分の頭で考え、いろいろな発見をしていく。たとえば、受け身の 1 時間目の授業の感想では、「今まで習ってきた文とポイントが違っておもしろい。」とか「今までと逆の見方をする文を習いました。」といった感想が多く見られた。関係代名詞の 1 時間目の授業では、「今日の授業では物ばかりでしたが、人でも同じように which を使っていいですか?」と、教師がうれしくなる(?) 感想を書いてくる。このような感想は、教科書で説明から入って、本文を暗記させる一般的な授業では出てこないものである。

教科書の基本的な編集方針の一つに、学習者の負担(目先の)を減らすためになるべく日本

語と同じようなところ（日本語の発想でいいところ、あるいは日本語を単純に英語に変えても支障のないところ）をまず学習、理解させ、それから大きく違っている点を提示して、ほんとうはこういうことだから、覚え直しなさいということがある。（と思われる）

間違えやすいトップにあげられている数の概念に大きく関わる、they, we, these, those の新出ページは、本文 118 ページの中で they (p.56) we (p.56) these (p.74) those (p.74) である。つまり、日本語と同じ感覚で使える単数ばかりをまず扱う。

一般動詞の三単現も同様である。一般動詞の現在の文は、まず一、二人称の文が 28 ページ（だいたい 6 月ごろ）に出てくる。三人称の文が出てくるのは、50 ページ（10 月から 11 月に習う）である。「好き」は「like」, 「テニスをする」は「play tennis」と覚え、慣れた頃に My father で始まったら “likes” “plays tennis” にしなさいと言われ、大混乱だけならまだしも、英語嫌いをさらに増やす効果しかない。^(注1)

このような教科書に対して GDM は、日本語と英語で考え方が大きく違う点に、なるべく早い段階で気づくように Graded されている。カルチャーショックを与え、前述の受動態や関係代名詞の感想のように自分で気づかせ、どう対応すればいいか考える手立てを与えていく。These / Those は、GDM で週 4 時間教えたら 1 ヶ月たつ前に習い、They については 1 時間目あるいは 2 時間目に数によって使い分けなければいけないことを学んでいく。

三単現についても、see / sees あるいは do not see / does not see を同時に提示し（コントラストさせ）その使い分けのルール^(注2)に気づかせ、定着させていく。その導入の 1 時間だけを見れば、like / play だけの方が理解しやすく、負担は少ないが、最終的なきちんとした英語の理解に必ずしもつながっていかないことは明白である。

中学 3 年生の学習でのおもな新出文型は、現在完了、受動態、後置修飾、間接疑問文などがあり、どれも日本人には理解が難しいものとなっている。特に日本語と大きく語順が異なる後置修飾は、入門期から日本語訳に頼って学習しているとさらに難易度が増すことになる。この後置修飾、特に関係代名詞の指導について、教科書での取り扱いを確認し、それに対して GDM を使った実践の有効性について考えていきたい。

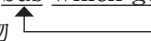
注 1 *New Horizon* 2014 年版 1 年

注 2 GDM を使って学んでいる生徒は文法用語を教えられていないので、この場合のルールも自分の知っている知識を使って整理していく。具体的にはそれまでに習った is am are の文で is を使っていた文では、sees / does not see を使えばいいというように使い分けしていることを、生徒の言葉から知った。これは三単現という言葉で使い分けていくよりもはるかに実際的な効率のいいルール作りである。

2 後ろから修飾という説明は効果的？

教科書 (*New Horizon*) では、まとめのページで次のように示している。

This is the bus which goes to Midori Park.

先行詞 = 物  bus を修飾している

このような説明の仕方は、教科書をはじめ問題集や参考書で一般的に使われている。しかし、英文の内容を理解するとき、図のように which 以下の部分が前にさかのぼって bus という単語を修飾するという考え方が有効だろうか。読んでいるときなら、次の文に行くのをやめて

busの内容を確認する時間を作るが、会話とリスニングテストで次の文がすぐに続くときにはそんな時間的余裕はない。そう考えると、後ろからひっくり返って前の語を説明するという理解の仕方は、有効ではないといろいろなところで言われているが、教科書では依然として、上のような説明を続けている。(注)

コミュニケーション能力ということがよく言われるが、この「後ろから修飾する」という考え方にはコミュニケーションの観点が入っていない。コミュニケーションとは情報のやりとりであり、必要な情報を相手に伝えることである。前述の文はまとめて使われている説明のための文なので、次の文で関係代名詞節の働きを考えてみたい。Tom is running into the bus which goes to Midori Park. この文を相手に言うときに、バスは何台見えているかという観点で、教科書の説明では欠落している。1台しかいない場面なら、which以下は必要な情報ではなく、このような文は使われない。少なくとも2台以上のバスが見えていて、the busだけではどのバスか分からないので、which (Which bus? と聞くのと同じ気持ち) goes to Midori Park と必要な情報(不足している情報)を付け加えている。

英語の文はもともと、subject(その文のテーマ、主語という日本語は正確なイメージを伝えない)に必要な情報を付け加えていくという構造になっている。

The boy + is walking + with a bag on his back + in the park.



このように絵で示すと明らかになるが、頭の中でも「男の子」にまず「歩いている」という情報を付け加え、それに「かばん」とその場所「背中」が付け加わり、最後に背景の「公園」が出てきて、この文が表している場面ができあがる。「その少年はかばんを背負って公園内を歩いています」と日本語に訳さなくても、このイメージができれば英文の内容は十分に理解できるし、そのほうが分かりやすい。

後置修飾においてもこの英文の大原則から外れてはいるわけではない。GDMを使って教える効果的であるが、関係代名詞をはじめとする後置修飾は、学習者にとって難しいことではある。よって、1年生の段階から前置詞による後置修飾を意識的に指導していくことが有効である。例えば、before / after を1年で学習するが、そのときに次のような文を数多く練習させるとよい。Monday is after Sunday. Friday is before Saturday. これに次のような文を入れると関係代名詞の文への準備となる。The day before Sunday is Saturday. The day after Monday is Tuesday. バリエーションとしては number / month / between などが使える。

また、教科書では for が比較的早く出てくる。教科書では What do you have for breakfast? という文が初出であるので、その前に私はコップを使って導入している。コップを3つ提示し、S: I see three cups in your hands. / You have three cups in your hands. T: This cup is for tea. This cup is for coffee. This cup is for Japanese tea. 練習をして、それぞれ違う場所に置く。他のものでさらに練習してから、コップに話題をもどして、T: Where are the three cups? They were in my hands. Where are they? The cup for coffee S: The cup for coffee is on the table. The cup for tea is in the box. The cup for Japanese tea is on the seat. この「the

cup for tea」というのは関係代名詞節と同じ感覚であり、目の前の実物を見ながら言うので言いやすい。

注 高校の教科書の「PRO-VISION」*English Communication I* (桐原書店)では、「名詞の後ろに情報を追加する関係代名詞 who, which」とか、「だれて、それは… → 情報追加を予期」「whichは『どれて、それは…』と情報追加を予期」といった説明をしており、このような教科書も出てきているが、中学校ではない。

3 教科書の指導順序

3年の2学期に学習する後置修飾の文は、関係代名詞節、接触節、分詞の後置修飾の3種類ある。これらがどの順序で出てくるのかを各教科書で調べると、どの教科書も分詞、接触節、関係代名詞の順であった。関係代名詞の指導順は、

〈*New Horizon*〉 who that (which) that (which) 目的格 (注)

〈*New Crown*〉 that that 目的格 who which

〈*Sunshine*〉 who which that which 目的格

10数年前に調べたときは、関係代名詞からの教科書、接触節から教える教科書、分詞から導入する教科書というように三者三様であった。しかし、現行の教科書ではどの教科書も分詞から指導し、次に接触節、つまり関係代名詞の省略された形から入り、最後に関係代名詞の文を学習するという順番になっている。この理由は確かめたわけではないが、たぶん実際の日常生活で使用頻度の高い方を先に指導するという方針があるように思われる。例えば

① Yesterday I got a camera made in Japan.

② Yesterday I got a camera which was made in Japan.

どちらの文がよく使われるかといえば、①である。発話の心理からいって、be動詞の部分を正確に言うのは面倒くさい(ネイティブでも)からである。しかし使用頻度とその言語を外国語として学習するときに、その言語を理解するのに効果的な順序とがいつも同じではないことは明らかである。

短縮形についても同じ事が言える。英語の最重要概念の一つであるbe動詞を例にとると、What's this? It's a book. That's a table.と短縮形を使うのに対して、Thisは短縮形がないので、This is a door.となる。入門期においてこの短縮形が英語の基本的構造を理解させるのに効果的とは思えない。ましてや小学校で文字を使わないという条件を入れると、さらに問題が多いと言わざるを得ない。

注 (which)のかっこの意味は、「thatまたはwhichを使います」という説明がつけられている。関係代名詞の基本はwhichなのに、この扱いは!!

4 疑問詞 which を大切に

3年で学習する関係代名詞、接触節、分詞による後置修飾を指導する順序はどの順番が効果的だろうか。まず基本的に英語と日本語の構造が違うことを感じさせ、英語の基本である「必要な情報を付け加える」という感覚をつけるのに効果があるのは、関係代名詞のwhichである。第2章でも触れたように、複数の可能性(2台以上のバス)があるなかで1つのものに絞り込むための情報を付け加えるという感覚は、複数のものからどれ?と尋ねるwhichそのもので

あり、いちばんイメージしやすい。だから which が使われるようになり、関係代名詞という品詞が別に新しく作られたわけではない。例えば部屋にドアが2つあって、One is open. The other is shut. という場面で、Please put this picture on the door. と指示されても候補は2つあってどちらか分からないので、Which door? と聞く必要が出てくる。だから必然的に、あるいは自然と the door に which is closed と付け加えることになる。こう考えてくると、最初に関係代名詞 which を教え、そして次に不足している情報の対象が人の時は who を使うことを理解させる。まずこの関係代名詞節を使って必要な情報を付け加える感覚をしっかりと定着させることが大切であるし、有効であると言える。

このような観点から次の指導順序を提案したい。

- ① 関係代名詞（主格）
- ② 分詞による後置修飾
- ③ 関係代名詞（目的格）
- ④ 接触節

②と③の順序は逆もあり得る。②と④については、関係代名詞を省略した形として指導する。関係代名詞を教える順は、疑問詞の感覚そのまま使える which を先に教えてから who に入る方が効果的である。この2つの使い分けができてから that を指導する。

教科書 (*New Horizon*) では、分詞による後置修飾のあとの次の新出文型は接触節ではなく、間接疑問文である。この間接疑問文の学習においても、関係代名詞が既習事項になっているとスムーズに導入しやすい。というのは、ワークシートの振り返りを読むと「関係代名詞」という文法用語を授業のなかでは使わないので、生徒は「which の新しい使い方」とか、「今まで文の初めだった which が文中で使われる」といったとらえ方をしていることが分かる。関係代名詞という新しい別の言葉を習うと捉えるよりもこのほうがはるかに有効であり、そこから対象が人になれば which ではなく who というのも自然に理解できる。ある生徒は感想に「which と who にこんな使い方があるなんてびっくりした。when や what でも使えるのかな？」「which と who が出てきたのだから、where や how はいつ、どんなふうに出てくるか楽しみです」などと書いていた。この発想がとても大切である。which / who の延長線上で間接疑問文を捉えた方が、学習者にとっては理解しやすいだろうし、間接疑問文における語順の変化の理解にも効果があると思われる。もちろん文法上のカテゴリーは違うものであるが、文法上の違いを理解することが、その文が理解しやすくなるということにいつもつながるわけではない。

5 関係代名詞 1 時間目の授業の指導例

- (1) 指導項目 which
- (2) 指導時期 3年10月下旬
- (3) 指導のポイント

- ・ 疑問詞 which の意味をもとに、「どっち」という気持ちが必要な場面で、その内容を which 以下で付け加えていく感覚をつかませる。
- ・ 目の前の物を見ながら英文を聞いたり話したりすることが、特に関係代名詞節を使った文では有効なので、場面設定をていねいに確認していく。

(4) 扱う文

- ① He put the picture in the box which was on the seat.
- ② She will go out of the room through the door which is closed.
- ③ I will put the card on the seat which has four legs.

(5) 場面設定

①の文の場面は机の上に同じ形、同じサイズの箱が2つ置いてある。色とか大きさで見分けがつくと the big box とかでどちらの箱か言えるので、同じ箱を使うことが必要である。One box was on the floor. The other was on the seat. という状況を確認する。黒板から写真を取り、それを箱に入れてもらう。生徒が指をさして I will put the picture in this box. と言えばどちらの箱か相手に伝えることができるが、指さしを止めると、どちらの箱か分からないので Which box? と聞きながら You will put the picture in the box which was on the seat. ポイントはbe動詞を過去で使う場面設定である。現在だと the box which is on the seat のように関係代名詞を使って言えるが、the box on the seat と既習の言い方でも言えてしまい、関係代名詞節の必要性がない。しかし過去は関係代名詞が必要となる。



②の文では、教室にある2つのドアが1つはあいている、もう1つは閉まっている状況で、いつも教室に持ってきているバスケットを廊下に置いておく。そのバスケットを生徒に取りに行ってもらおう。I will go out of the room through the door. と既習の文でここまで言えるが、ドアは2つありどちらのドアか分からないので、I will go out of the room through the door which is open. という必要が出てくる。

③では、1本脚や3本脚、4本脚のイスを用意しておく。You see three seats. One has one leg. Another has three legs. The other has four legs. これは1年で学習した内容で生徒になじみ深いものである。そのイスの上に何を置くかは、授業の流れや今までの学習でどんな物を使ってきたかで何が適切かは変わってくる。He put the card on the seat which has one leg. I will put this card on the seat which has three legs. といった感じで不足している情報を which で付け加え、どのイスかを相手に伝えることができる。

(6) 授業の流れ

まず疑問詞 Which のレビューをしっかりと行うことが必要である。材料としてはトランプ、スプーンとフォーク（持つ部分が同じ形状）などが使いやすい。上記の場面設定で述べたように、One is … Another is … The other is … という文が使えるようになってくると自然な流れになりやすい。扱う3つの文のどれから導入するかは、授業全体の流れのなかで考えることが大切である。

目の前で見て話す、聞く（ライブ）の次は、絵を使って文を確認する。ライブで扱った3つの関係代名詞の場面のどれかを選び、その場面を絵で提示し、その英文をまずは言えるようにする。それから黒板に英文を書いて確認させる。最後にワークシートで問題を解き、答合わせをする。

(7) 生徒の感想

次は1時間目 which 2時間目 who を指導したあとの生徒の感想の一部である。

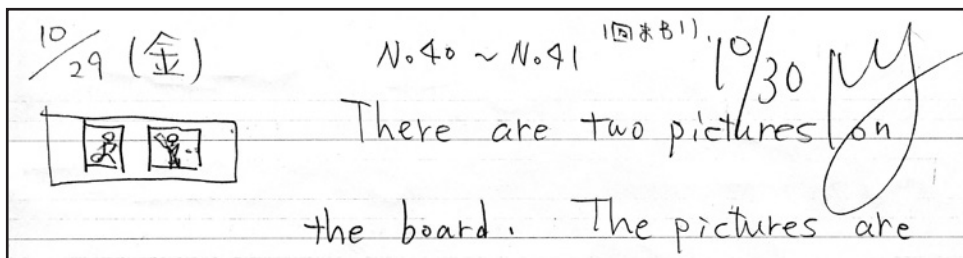
- ・前回は which で今回は人で who だから、もっとほかの単語 what や where など新しい使い方ででてくるのかと思った。
- ・who や which のあとにどうつづくかがまだよくわからないので、次の授業で分かればいいと思います。1P とかでどんどん使って行って早く身につけたいと思いました。(1P は毎日の課題の呼び名)
- ・which, who と出てきて「もしかしたらまだ出てくる!？」とそわそわしながら授業をうけていました。でもまだ他には必要ないよなーと考え直して自分でへこむ。
- ・今回は who をやりました。またびっくりしました。what とか when とかもあるんですか? which も who も上手に使いこなせることができるようになれば英語の力も上がると思うので使いこなせるようにしたいです。
- ・長い文が多くなってきたので、まず何を説明してから何を説明していくのかがポイントだと思いました。(あのバスの窓の問題を思い出して)^(注)
- ・which や who は普段の生活からも考えやすいと思うので、いろんなパターンを使ってみたいです。
- ・まったく新しい単語を習ったわけではなく使うはばが広がっただけなので、しっかり使えるようにしていきたい。
- ・すごく長い文が作れるようになるので楽しいです。スムーズにこの長い文が言えるようにしたいです。難しそうで意外と簡単なのでしっかりと意味を確認していきたいです。
- ・今日は前のNo.40で習った which のつづきの who をやりました。2つの使い分けを絵を見たりしてできるようにしたいです。文をそのまま覚えるのではなくて、絵を見て答えられるようにしっかり復習をしたいと思います。
- ・which と who が上手に使えるようになった。

注 1年の6月に学習した The windows of the bus are closed. の文

(8) 生徒の課題より

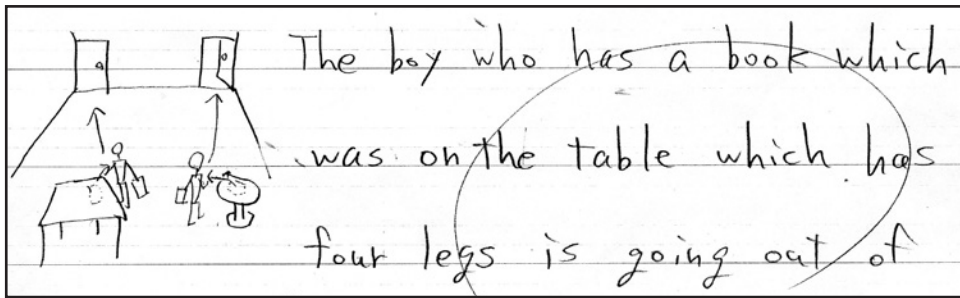
次の資料は、家庭学習 1P ノートで生徒が書いてきたものである。1つの文に関係代名詞を数個使っており、スマートな英文ではないが、必要な情報を付け加えるという感覚が表れており、関係代名詞を2時間習ったあとに書いた英文として、授業のねらいがこの生徒に関して達成されたと言える。(生徒の書いた文をそのまま転記)

-資料-



There are two pictures on the board. The pictures are of "Matsui". One is of Matsui

who plays baseball. The other is of Matsui who plays soccer.



The boy who has a book which was on the table which has four legs is going out of the room through the door which is closed. The boy who has a book which was on the table which has one leg is going out of the room through the door which is open.

10/29 (金)

N.40 ~ N.41

10/30

My



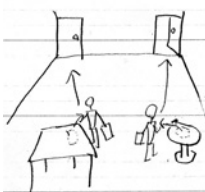
There are two pictures on

the board. The pictures are

of "Matsui." One is of Matsui

who plays baseball. The other

is of Matsui who plays soccer.



The boy who has a book which

was on the table which has

four legs is going out of

the room through the door

which is closed. The boy who has a book

which was on the table which has

one leg is going out of the room

through the door which is open.

火曜会のこと

唐木田 照 代

火曜会というのは毎月第3火曜日午前10時から12時まで希望者が渋谷区の公共施設に集まってEP1, 2のデモを順番にやりコメントしあったり、トークの練習をしたり、また日頃抱えている疑問を話し合ったりしている会です。ふだん違う場所で子供のクラス、大人のクラスで教えたり、またこれから教えたいと思っている人達の集まりです。毎月第3火曜日がすぐに来て、その繰り返しがいつの間にか20年以上になったのだと気が付きました。いつ始まったのかははっきりとはおぼえていませんが私が現在は一番古いようです。

この会ができた頃は御殿場セミナーにとてもたくさんの方が集まり、GDMをもっと勉強したいという勢いがあふれていました。鎌倉勉強会、現場教師の会、千葉の勉強会、東京女子大の勉強会、土居先生を中心にした発音勉強会などなどありました。月例会は土曜日午後なので平日の午前中も勉強したいという人たちが火曜会を作りました。当時は小川和子さんが中心で辛口コメントをしっかりと下さったナと思い出します。

その後違う風が吹いてきて会員がだんだん少なくなり、わずか数人が集まり、デモはひとつに、Basic Englishの勉強をしようと*Pinocchio*を読んだことを覚えています。そうこうしているうちにまただんだん少ないながらも参加者が増え今は10人ぐらいの人が集まっています。現在はみんなやる気にあふれ、本音のコメントが飛び交う勉強会です。

火曜会メンバーからの実践報告

1. GDMへの理解を深める

GDMの講師になって5年目。現在、週13時間GDMでの指導を行っています。中学生のクラスでは1～2年生にEP BOOK 1～3の前半、また大人クラスではBOOK 1～2の内容を教えています。

私は中学生の頃、GDMで英語を学習したので、GDMの良さは体感としてありましたが、講師側に立ち初めてGradingの緻密さを知り、改めてGDMに魅せられました。といっても、初年度は経験者の真似をすることで精一杯で、今振り返ると、EPを本当の意味で読み込めていませんでした。2年目、BOOK 2の内容を指導するとBOOK 1がわかるようになりました。3年目以降、白黒のEPに色がついていくかのような感覚になったのを憶えています。授業を重ねれば重ねるほど、EPに示唆されているものが透けて見えてくるようになり、同時に疑問も増えてきました。焦らずに、GDM年齢を重ねていく過程でより理解を深めていけたらと思っています。

火曜会は去年から参加するようになりました。火曜会を一言で表現するならば、切磋琢磨できる場所。教える環境も異なれば、学習者も異なるGDMの講師陣が集まっています。わずか2時間弱でBOOK 1から2つ、BOOK 2から1つのデモを行う濃密さと、「私のクラスではこうしている」「～さんはどうしてる？」といったように、それぞれが実践している方法を紹介し、

ディスカッションし、アドバイスし合えることが魅力です。参加者と定期的に顔を合わせることで、互いの授業の様子をリアルタイムで交換でき、目の前の授業に直結する情報が得られます。月に一度は少ないようにも感じられますが、その貴重さが濃密な時間をつくりだしているのではないかと思います。 (合川 麻由)

2. 火曜会に参加して3年が過ぎ去りました。私は、以前地域の英会話サークルに参加していて、その中のお友達が自由に英語をお話する際に、いつも明確に解りやすく話されて不思議に思いたずねてみました。その方から、*English Through Pictures Book 1, Teacher's Handbook, worksheet*のお話を伺うことが出来、指導方法も教えて頂きました。そのお話の後で、私も教材を揃え、市民館を利用し教え始めました。

初めは、ハンドブックを頼りに行っていました。習った経験もなく、少しずつどう指導したら良いのか解らなく自問自答が続きましたし、限界を感じてしまいました。

火曜会に参加させて頂くことになり、何度も汗だくになりながらデモに挑戦致しました。火曜会メンバーの方々の懇切、丁寧な指導の元で生徒の前で少しずつ授業がスムーズに展開出来る様になりました。火曜会で学べる機会に恵まれたお蔭と思います。本当に心より感謝したい存在が火曜会です。これからも、さらに前にと努めて行きたいと思います。 (伊藤千津子)

3. 火曜会に参加したのは10数年前だったでしょうか。B1後半をじっくり勉強したのは、初めてのことでした。意識が変わってきました。

3年後やっと大人のクラスを作り加藤さんとB2をやり通せたのです。ただ2度とp75以降はやるまいと決心したことでした。

火曜会では、B1で毎回気づきを貰い、B2は件のp75以降になったのです。なんと面白い！目が開かれました。

長年続けてきた塾は、2012年から中学は1コマを小学生からのEPに変更し、中1でB1が終了するクラスでました。B2は自信がなく、学校勉強との兼ね合いも微妙な所が出てきます。私はB2に進む気持ちは全くありません。例年通り学校勉強のみにすると、宣言しました。覇気のない2回目学校勉強が終わった帰り際、一人の生徒が私につぶやきました。「私、あの小さな青い本をやりたかった。」B2の試授業をした時の皆の顔が決定打でしたね。

続かないだろうと始めたB2のみのクラスは3年生になりました。頼りの火曜会の勉強進度に追付き、追越すことになりました。どうにか生徒さんと歩みを進めp120で終了しました。GDMの力と火曜会、他の方の支えがあっただけでできたことでした。

現在、中2、1年生もB2に進んでいます。週1回55分の稽古事の範囲で、結果も出さねばならない塾として、見えてきた事も多々あります。が、ここでは生徒のつぶやきを記します。

* EPで今一すっきりしてない点が、学校勉強でクリアーになるな。(B1後半1年男子)

* B2はいつも新しいってわけではない。でも難しく楽しい。(B2前半2年男子)

* 役にたって、面白い。試験勉強の気分転換。(B2後半3年生達) (大野 晴美)

4. 大切な舞台裏

火曜会に参加するようになって十数年、その前は鎌倉勉強会で学んでいました。このような

舞台裏と言われている勉強会は以前はいくつもありました。

自分で授業をやって見せてコメントをもらう、の繰り返し。いつになったらOKがでるのかしら、と心の中で呟きながら長い年月を過ごしました。ある時「問題点はいくつかあるけど、今日は良かったじゃない」「一緒に大人のクラスもやりましょうよ」と火曜会で言われました。きびしいコメントの後で、ニコニコ顔でハグしてもらったことも。心に残っているのはうれしかった瞬間ばかりです。

後輩を育てる場であると同時に、先輩もまた自分自身のために努力を重ねていることがよくわかります。疑問点を教えてもらったり、相談事をする場でもあります。長い道のりではありますが、どの仕事でも立ち立つ前に修行時代がありますから、GDMにも当然必要な年月だと言えます。

さて自分のクラスですが、地区センターを拠点にいくつかサークルができ、EPにそって授業をしています。運営や会場予約もお願いして、負担費用は少なくしています。中高年の方々の向学心は素晴らしく、かつ協力的で一緒に授業を作っている実感があります。(自分自身と比較して)素直で几帳面な方が多く、宿題も歓迎のようです。短歌を始めたという生徒さんからBK 2 p.138の授業の後に一句届きました：〈whenever, 今日の収穫わくわくと、いつか使おうあたらしき言葉〉励まされます！

地元の施設を利用してクラスを作ることをお勧めします。GDMは学んだ言葉だけで話すので、だれもが理解でき、自由に平等に参加できるので地域の仲間作りに最適、文字通りの生涯教育です。
(加藤 准子)

5. 続いていく火曜会の魅力

私はカルチャーセンターなどでもうずいぶん長くEP 1, 2を使って授業しています。火曜会でデモをするときは改めて気を入れて前後をよく勉強し、絵を見直します。友達のデモに生徒として参加し、私が見落としていたことに気づくことがあり、ありがたいです。経験の長さに関係なく悩んで準備し授業し、他の人はそれに参加するというのは本物の魅力でそれに引きつけられ長く続けているのだと思います。

最近年齢の高い生徒さんが増えました。自分の余暇の時間に英語の勉強をしようという人達で頭に入って使えるようになるのはなかなか大変なこともあります皆さんの意欲と努力にはとても力づけられます。わかってもらえるように今までよりさらに細かいgradingを考えていると新しいやり方を思いついたりします。「英語のこんな勉強の仕方があるのですね。いいですね。」と言ってくださった方もあります。

昨年の夏から小学4年生5人のクラスを始めました。子供のクラスは10年以上ぶりです。子供たちが初めての言葉に出合い小さな声で言ってみて、だんだん大きな声でしゃべり、自分の類推で発言し、読んだり書いたりする様子は理解していく様子、頭の中の働きが透けて見えるようです。吉沢先生がGDMは10歳前後から始めるのが良いとおっしゃっていらしたことはまさに本当なのだと実感しています。
(唐木田照代)

6. 仲間がいる幸せ

中断していたGDMの勉強を再開したく、二男の幼稚園入園を機に火曜会に入会しました。

もう20年以上前のことです。月に1回午前2時間のみの例会ですが、本当に多くのことを学ばせてもらいました。EPのデモを皆で順番にやっていきます。授業者になった時はさまざまなことに気付かされ、忘れないように帰ってからポイントをまとめたりしました。特にまだ授業での経験がないところなどは練習の場として活用してもらいました。GDMの理論に基づきながら、ライブの流れ、使うものの良し悪し、写真や絵について、ワークの内容などGDMの授業の準備は細部までいろいろ迷うことだらけですが、それについてデモという経験でわかることがたくさんあるからです。また、生徒役になったときは普段のクラスのlearnersの気持ちに立ち返る貴重な機会になります。新しいアイデアをもらったり、意見交換をして気付かされることも魅力のひとつです。最近ではセミナーの準備のために理論やBasic Englishのトークの練習に時間をもらうこともありました。

入会当初は小学生クラスの準備に活用し、やがて大人のクラスを持つようになり、火曜会のあとの午後もクラスができ、1クラスが2クラスになり、かなり火曜日が多忙になりました。でもこの貴重な勉強会は私にとってGDMのクラスを持っている限り大切な時間です。一時3、4人しか出席者がいなくて寂しい時期もありました。そんな時も、「せっかく準備したでしょうから」とお忙しい中生徒役になってくださった方々に本当に感謝しています。現在は10人以上のにぎやかな会になり嬉しい限りです。新しい方からエネルギーをいただきながら皆で切磋琢磨できるようないい会にしていきたいと願うこのごろです。 (黒瀬 るみ)

7. 火曜会の出席を通してGDMについて少し理解したこと

火曜会はEP1のデモが2つ、EP2のデモが1つの構成になっています。各デモごとにデモについての意見を出し合います。計2時間(休憩含)です。

おそらくGDMのどの集会もデモをするときは、このようなデモ plus デモの講評になっていると思われます。

EP1のrelative whichまでがGDMの真髄があると思っています。特にtookまでがその中でも最重要だと思っています。EP1とEP2を少し読み込みました。物事の取り組みにおいて今までの経験から全体の最初の3分の1以内には最重要なことはほぼ出揃うとわかっていましたが、GDMもそうだったと思っています。

ライブ→写真、絵→文字という流れはおそらく理想的な学習の流れではないかと思っています。日本の教育において、授業の中で写真、絵が抜け落ちている点、つまり活用されていない点は、日本の教育の最大の欠点の1つだと思われます。確かに写真、絵が日本の教育に多少は教科書などにあることはあるのですが、挿絵のような扱いになっていることがほとんどではないでしょうか。

GDMのデモの準備はライブの準備と写真、絵の準備と文字の準備とワークの準備に分かれます。どれも細部まで注意して用意するのは大変なので、ライブの準備に一番集中してデモの用意をしています。ライブの出来がもっとも大切だと感じています。

A→B→C→Dと展開すると授業の構成を考えますが、それぞれでの生徒の位置と視点と気持ちをより把握することが重要とわかりました。さらに、1回のデモで「物語」、「完結さ」、「生徒の意識の持っていく方」が同様に注目すべき点です。

GDMの授業を通して言語習得は実技なんだなあと思いました。 (高原 秀明)

8. 火曜会と私

2012年の春、近所の小学生に英語を教えることがしたい、と言われた時に自分自身が小学生の頃に習った英語のテキストを思い出しました。なんとなくテキストの名前を憶えていたのでネットで調べると、懐かしいあのhatの絵が見つかりました。表紙が変わっていたので同じものか心配がありましたが注文してみると中身が同じ！！嬉しくなって、今度は月例会というのに参加する事にしました。そこで火曜会の事を知り、早速参加することに。あれからもうすぐ三年になります。

初めての火曜会。伊藤さんがtakeのデモをされていました。当時まだ教室を始めていなかった私は、すごい！！と思うばかり。まさかその2か月後に私も同じ舞台に立つことになるとは夢にも思わなかったのです。今でも覚えている初めてのデモ、I, You, He, She, Itの所。メンバーがSheばかりの中でHeはどうやるのだろう？から始まり、準備にすごく時間が掛かりました。本番も途中で立ち尽くして「もうできない〜！」と焦りっぱなし。でも皆さんとても暖かく見守って下さいました。あれから何度もデモをさせてもらって、毎回コメントを載せてメモをとり、少しずつではありますが成長させて貰っています。

回数をこなす事、そして何より見て下さる方々がいて下さるのが本当に有難いなあと思います。火曜会の後のランチも大切な時間で、何気ない会話の中にもレッスンのヒントが沢山あります。素敵な先輩方と一緒にさせていただけて幸せです。まだまだ一年生の私ですが、これからもよろしくお祈りします。
(中村 真子)

9. 私にとっての火曜会

火曜会の一員となって1年余りになります。参加できた回数は多くありませんが、私にとってこの会は貴重な学びの場となっています。私は現在大人のクラスで、初めてBOOK IIの後半を教えています。抽象的な内容、科学的な事柄を扱う内容が増え、生徒の皆さんに実感していただけるようなライブをどう組み立てたらよいか思いつかず、途方にくれることが多いです。そんな時、火曜会で見せていただく授業が、とても大きなヒントを与えてくれます。まずは真似をして、それから少しずつ工夫を加えていけたらと思っています。火曜会はまた、大切な練習の場でもあります。各人がそれぞれ授業をやってみて、様々なアドバイスをいただき、自分では気づけなかった視点を発見し、授業をより良いものへと高めていくことができます。多くの方々の努力で長く続いている火曜会ですが、これからも貴重な学びの場として、皆で大切にしていきたいと思っています。
(服部 正子)

10. 私にとって火曜会とは

「火曜会」という名称は私にとっては特別な響きがあり、長年公立学校で常勤で働いていた私には、月1回ではあるが、「平日の午前中」という、何とも素晴らしい時間帯に行われる「憧れの会」であった。早期退職して非常勤になり、めでたく入会してから、早くも3年近くが経とうとしており、自分の生活の中に、ようやく定着してきた感がある。

火曜会は和やかな雰囲気ではあるが、正に日々これ研鑽であり、授業の充実度は高く、毎回がいわゆる「研究授業」の連続であり、デモはほぼ毎回なされる方や、順番性で「先生」と「生徒」に代わる代わるなって、毎回ありがたいコメントがフリートークの形で飛び交うのである。

参加継続することで、大きな力をいただくこと間違えなしである。

学校現場では、残念なことに慌ただしい日々の生活に重点が置かれ、授業は「ひたすらこなす」という日常の悪循環になりがちであり、おまけに困ったことには、何とかこなしてしまうのである。ところが、GDMの授業はそうはいかない。毎回緊張感を伴い、ハッと気付かされることの多いこと！更には火曜会（月例会も同様に）では、厳しい目で見られるという意味で、大きな刺激になるのである。ともすれば、ずるずると名ばかりの「英語教師」という身分をひきずりそうな私の背中を叩いてくれる大きな存在となっているのである。皆様に感謝，感謝。

（伴野 温子）

11. GDMを知って4年目に入ります。知って間もなく自分の教室にGDMを取り入れるという、今思えばとんでもないスタートを切った私にとって火曜会はとても心強い存在です。「EPの最初の方はそんなに難しくないな・・・」と思っていたので、火曜会で初めてやったhere・thereのデモが最後まできちんとできなかつた時の衝撃は今でも忘れられません。頭の中では最後までキチンとできていましたし、練習した時も何の問題もなかったはずなのに・・・あんなにわかってもらえないとは！

考えるのと実際にやってみるのとでは大違い！！

まだまだ手探りの私にとって模擬教室を与えてくれるのが火曜会であり、また、厳しくも優しいメンバーの方たちのアドバイスをいただけるのが火曜会なのです。

これからも参加者の方々の、「・・・？」の表情にひるむことなく、皆さんと一緒に向上して行きたいと思います。

（前勝 和代）

授業で使う写真について考える

黒瀬 るみ

1. 写真の役割

GDMの授業は3つのモードで進めていく。実際の場面で体を動かしながら発話する筋感覚モード。これをライブという。それからライブの場面を絵で示して英語でやりとりするモード。さらに文字を示し、読み書くという言語的象徴的モードになる。この3つのステップがこの順番で基本的に1回の授業の中にもりこまれている。いいかえると、具体的な体験からはじめ、抽象度のレベルを上げて絵、写真による体験に移り、最後に抽象的な文字にいたるよう指導していく。1回の授業の中で目標となる語、文型、文法項目を抽象度の異なるさまざまなレベルで体験させるように授業を組み立てていく。

写真は主にこの第2段階で利用する。また第1段階のライブの中でも、実際に教室に持ちこみ不可能なもの（たとえば ship, street, animals など）の代わりに使ったり、場面（timely な出来事の写真など）を提示して導入する際に利用する。

2. 写真はライブと線画のワン・ステップ

実際の場面の中で体を動かしながら英語をいう体験（ライブ）より絵で示された場面についていう体験は抽象度が上がる。また写真と線画をくらべたら線画の方がより抽象的だといえる。

もちろん、写真がなくても線画できちんと目標の文を示すことはできる。線画を見ただけで生徒の口から目標の文がでてきた時はライブから線画へうまく進んだしるしであり、特に写真の必要性はないと思う。早い段階においてはライブと線画で十分な場合が多いといえる。目標となる文が細部を映し出す写真だとかえってクリアに伝わらないこともあるからだ。ではどんな時写真は有効なのだろう。

3. 写真を使う場面とは？

たとえば have を教える授業。have の root sense を意識してできるだけ動きがないように be に近い場面が必要だ。最初は This seat has four legs. This seat has three legs. などで導入して、やがて I have a pen in my bag.** has a pen in his hand. などとライブで広げていく。しかし、ライブでは静止した状態を作りにくく不自然な have になりがちだ。そんな時写真を利用する。教室から外へ出ていろいろな人を観察して文を作る体験の代わりになる。The man has an umbrella in his hand. He has a hat on. 少し進むと、This man has his finger on his chin. This man has his hand on his chest. などの文については写真の利用度は高い。

また、*English Through Pictures* (以下 EP) Book 1 の 110 ページで clear を教える時はどうだろう。まずライブで liquid などを使って clear は導入する。しかし、The air is clear. I see the mountains. When the air is clear, I do not see them. などの文は EP の線画からは clear の意味は伝わるだろうか。写真を見せてすみきった空気を伝え生徒がその空気をイメージしてはじめて clear がわかる。意味がわかれば自分で外で体験したことをより鮮明にイメージできて発話できるのではないだろうか。

Book 2に進めば季節の流れや the earth, the sun, the moon, 物の discovery の話など写真の利用は必須といえる。map, transport, weather など写真を使えばライブに近いイメージをつくることができる。身の回りのことから世界や自然界まで内容も抽象度が上がっていくので線画だけでは表現が不十分なものも多々あり写真の助けがかなり必要になってくる。

4. 写真を使う際注意したいこと

我々教師は授業で写真を利用すべく雑誌や新聞、チラシ、インターネットなどでいい写真はないかと調べる。しかし、目標の文を頭に描きすぎて、時にかたよった写真を選んでしまう。また、よけいなことまで表現できる写真になってしまう。授業で使ってみると、思わぬ発話がでてきたり、目標の文がでてこなかったり、生徒の興味や発想を別の方向へ刺激してしまうことがある。また、未習の文をいわせて grading に影響がでたりする失敗もある。写真は線画と違ってカメラマンの撮影意図が感じられることもあり、注意して選ぶ必要がある。生徒の目線にたって、できるだけシンプルでよくばらない写真を選びたいものである。

最近ではデジカメでほしい写真を撮影してプリントして簡単に授業で使えるようになった。先日は keep を教えるのに自分の部屋の中を撮影して絵をどこに keep しているかなどを写真で伝えた。keep などなかなかライブでは伝えにくいことばだが、写真の力を借りると生徒がイメージでき発話への橋渡しがよりスムーズになるような気がする。

授業で使う写真は私のクラスのような少人数では A4 判で十分だが、クラスサイズによっては PC から写真をスクリーンに映しだして生徒の視点を集中させて、イメージを広げ、話をより活発にすることも可能であろう。クリックしてクローズアップなども可能になっているので新しい使い方もできる。いろいろな有効利用ができることを期待したい。

授業レポート「耳なし芳一」大人のクラス奮戦記

石井 恵子

EP 1, 2を終了したばかりの大人のクラス(90分授業8名)で, L. ハーン作『耳なし芳一』(Basic English 訳)に挑戦しました。選んだ理由は, クラスの中に自ら語表をコピーして皆に配ったりするなどBEに関心を持ち始めた受講生がいたこと, 広く知られた話なので遅れ気味の学習者にも親しみが持てるのではないかと, またとても聴きやすい朗読の音声教材があることなどでした。

準備として, まず本文を授業回数に合わせて20等分する作業を始めました。ところがいざ始めてみると, 教える側の私自身に話の内容やBEそのものにも理解していないことが多々あることに気づき, ハーンの原文と照らし合わせたり, いくつかの日本語訳を調べるのにすっかり時間を取ってしまいました。また受講生のほとんどが高齢者なので, 長々しい文は短かくした方が理解しやすいだろうと少し手を加えかけたところで, しかし音声教材を使うつもりなら書き換えはできないことに気が付き断念。そうこうするうちに秋学期が始まってしまい, 見切り発車でスタートした授業は, 特に最初の3回が難解な構文と新出語が続出で, 内心大変なものを選んでしまったと後悔していました。

しかし何とか乗り切れました。その乗り切れた理由をいくつか振り返ってみます。第一の理由は, GDMの力です。毎回GDMで学習した事柄でその日の授業に必要なことばを復習しました。忘れていても, 前に使った道具を見せ, 前にやった動作をすると, からだと脳が記憶を呼び起こしてくれ, その復習レッスンが今日やる箇所と関連するらしいことを予測し新しい内容につなげてくれるのです。授業の始まりの部分でいつも勢いのようなものを作りあげることができました。

第二は, 臨場感のある授業ができたことです。数回でしたが, 教室を庭や墓地や屋敷に見立てて, 芳一, 住職, 侍などの劇中の人物を演じながら英語を言い, 新出語はその場面になった時にその場で生徒を動かしながら導入しました。時には盛り上がり自分たちで話を膨らませ皆で笑い転げたこともありました。

第三は音読の重視です。子どもにお話を聞かせるようなつもりで音読をしてもらい, 他の人はテキストを見ないでその朗読を聴くだけで場面を思い描いてもらいます。さらに声を出すことがからだ全体の動きと関係あることに気づいてもらうため, 立ったり座ったり歩いたりいろんなワークをやりました。音声教材はその前後で聴いてもらいました。

第四に, ワークシートの活用です。大抵ぎりぎりの前の晩, 生徒の面々を思い浮かべながら作りました。授業中は板書を写したりさせないので, A4一枚でも形として手元に残る紙があって, それに赤丸などがつけてあったりすれば, 理解に時間のかかる人にも達成感のようなものを持ってもらえるし, 復習や欠席した人にも役立ちます。もちろん実際にやってみたら失敗作だったというのもあります。欲張って詰めこみ過ぎたり, ひねって複雑にしたものは, 大抵だめでした。害はあっても益なし, シンプルで少なめがいいです。

最後に, 学習者への個別の配慮です。だんだんクラスの皆に遅れを取るようになってきた学習者のための苦肉の策として, あくまでも家での参考にと私が作った日本語訳の紙切れを配布

しました。よく出来る人は、自分は訳など見ない方がいいからと初めから受け取らない人、日本語を見て英語で言う練習に使いたいという人、それぞれ自分のやり方を見つけていました。また一人の受講生が般若心経を持ってきて皆で芳一のとった姿勢で瞑想してみようとなった時には、私の頭の中は今日の授業予定のどこを削るかでぐるぐるまわっていましたが、芳一が恐怖に打ち勝つ大事な場面なので学習者の意欲に寄り添うことにした結果、皆が幸せな気分になりました。言いたいことが言えない英語力でそれでもどうしても言いたいことが出てきた、という生徒に対して、日本語禁止は崩さずしかも意欲を汲む、教師の舵取りが試されるところです。

実は、今日が最終回の日でした。「よくがんばったね。」とは、何と皆さんから私に対するねぎらいのことばでした。皆さん自身の感想は、この6ヶ月間本当に楽しかった、やむを得ず休まなければならない日は残念でならなかった、CNNなどを聞く講座もとっているが、このクラスではこんな少ない語彙でストーリーが楽しめることが分かっておもしろかった、はじめはとっつきにくかったが回を重ねるうちに同じ語や似たような文型が何度も出てくることが分かった、目を閉じて芳一役をやった時は本当にこわかった、などおおむね好意的でしたが、「こういう英語は日常でも本当に通じるんですか？」というもっともな感想もありました。ではそのあたりを探りがてらもう少しBEの勉強を続けましょう、と次学期に思いをつないで、6ヶ月20回にわたる「耳なし芳一」は感慨深いものを残して終了しました。(2015年3月12日記)

GDM の授業と写真

麻 田 暁 枝

初めて GDM のセミナーを受けた時、自分が今まで習ってきた英語の授業とはかなり違ったやり方だったので、新鮮な驚きがありました。自分の体をフルに使い、教室の場面を使い、いろんな実物が出てきたり、写真や線だけで描いた絵が出てきたりと。中学校で受けた授業では、「リンゴ」は「apple」とことばからことばへの変換がほとんどでした。たまに写實的に描かれた物の絵を見せられたりしたこともありました。GDM のクラスでは、毎回、視覚的に場面を使ったライブ、写真、そして線画と移っていきます。特に、写真を見て英語を言うのはとても興味深かったです。

さて、いざ自分が教え始めると、いろいろな写真を集めようと、いつも気を付けていました。雑誌や新聞を目にする時は、いつもよい写真はないかしらと思いながら見ていました。気に留まる写真があると、この写真は、EP のどのあたりで使えるか、どんな文が言えるのかをじっと見つめて考えていました。穴のあく程、同じ写真をじっと見つめていると、娘が、「GDM に使えるか考えてんの？」と、横から声をかけてきました。また、「この写真、GDM にどう？」と協力的に持って来てくれたりすることもありました。

こうして一生懸命に集めた写真も、クラスに持っていくと、私の思惑どおりにうまくいく時とそうはいかない時もありました。写真は、クラスでのライブから線画へ移る間のワン・ステップとしてとても有効です。どんな写真をどう使ったのか、写真選びについて振り返ってみたいと思います。

新しいことを導入した後に使う写真は、出来るだけ余分な物のないシンプルな写真を選ぶようにしています。その日のポイントが誰でも迷わず言えるような写真を見せるようにしています。ある程度の頁まですすんで、まとめの復習をしたいときには、生徒の自由な発想で、今まで習ったことがいろいろ言えるような写真も使ってみました。見せる前には、大体こんな文が言えるだろうと予想しますが、思わぬよい文を言ってもらえて嬉しかったこともありました。また、ひとりの生徒の発言が、それをきっかけとして、次々と他の生徒たちの発言へとつながり楽しい雰囲気になることもありました。

いいなあと思える写真でも、小さいとクラス・サイズによっては、みんなが見えないので相応しくないとします。“He”や“She”に選ぶ写真の人物は、日本人が写っているものよりは、ネイティブ（外人）の写っているものが良いと言う意見もありました。英語を習うのだから、英語圏の雰囲気の伝わる写真が良いと言う意見もありました。

生徒の年齢層や性質を考えて選ばないといけないと実感したことがありました。大人のクラスで、評判の良かった写真を子供のクラスで見せたら、ポカーンとして何を言ったらいいのという反応でした。教師が提示した写真の意図がくみとってもらえず、白けてしまったこともありました。

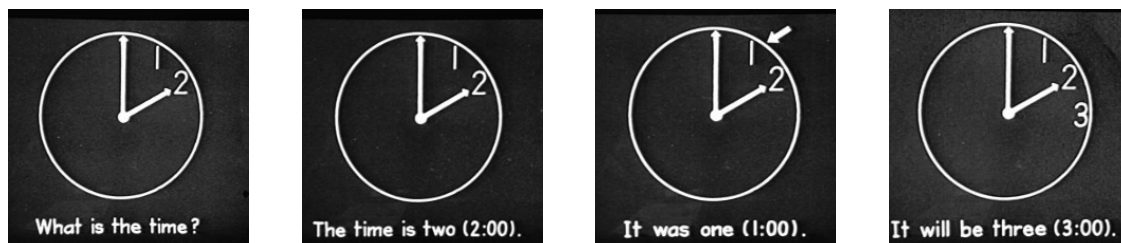
数回の授業の後の一区切りに、黒板にいくつかの写真を貼り、好きな物を選びライティングしてもらいました。見えたものから想像豊かにストーリーへと発展した作品もあり、発表してお互いの想像力を刺激し合いました。

最近、新聞もカラー化され、ネットからも良い写真が得やすくなってきたので、有り難い時代になりました。授業の流れの中で、写真は必要だと思います。よい写真を見つけて有効利用していきたいものだと思います。

DVD をお奨めします

山崎典子

会員 U さんが「DVD の編集をしました！」と言って月例会で見せてくれたのをきっかけに、改めて DVD を視聴しました。



授業では English Through Pictures (以下 EP とします。) を使用して reading をしていますが、ご高齢の皆さんにとっては眼鏡をかけていてもテキストの文字は見にくく、難儀されています。DVD を見ているとリチャーズのやりたかったことが見えるようでした。例えば時計を使って will be・numbers が導入される EP pp.35 では、1 つの絵に 4 文書かれています。同じ個所を DVD では 4 つの絵にして出してくれます。It was one. のときには矢印がさっと出てきます。DVD では矢印や点線を効果的に使うことで、EP よりもさらに学習者の脳みそに働きかけていると思いました。ただの reading 教材ではないのです。リチャーズがもっと長生きしていたら、先生がいなくても学習できるような視聴覚教材を作っていたのでは? と思います。U さんは背後のザーザー音を消去し、(手でカメラを持っていたため?) 上下のぶれがなくなるようにし、それを I-pad に入れて、ホワイトボードに映写してくれました。授業でより使いやすくなったわけです。教室に PC を置いていなくても使えるように考え編集してくれた U さんに感謝です。

Basic / Wider Basic と Ernest Hemingway の作品言語

後藤 寛

まえがき

米国のノーベル文学賞作家 Ernest Hemingway の死後すでに 50 年以上の年月が経ち、今日における日本の Hemingway 作品の研究は筆者の学生時代の頃のものとは大いに異なってきている。理由は彼の死後、遺作として 1960 年代半ばから 1990 年代末までに新たに公にされた作品が、細かい書き物を含めて生前のものより多いほど続々と出てきたからである。

E. Hemingway は豪快できわめて男性的な人物であるように思えて、実は女性的な面が描写される作品がいくつもあり、人間としては理解しにくい作家である。遺作で特に 1986 年刊の長編小説 *The Garden of Eden* 『エデンの園』などがきっかけともなり、彼の Sexuality (Hetero- / Homo- / Bi- / Trans-) とともに、Feminism, Fetishism などの観点からも世界的に全作品が見直されている。

近年、日本でも日本ヘミングウェイ協会や日本アメリカ文学会などで Intertextuality (間テクスト性) などの視点から、Hemingway 作品の新たな追究がなされている。こういう文学作品の分析手法に関しては拙稿 (2014a) でも扱った。筆者自身、日常的に Basic との絡みで、日刊英字紙による感情を排した客観的叙述による格調ある時事文のスキャン読みとともに、略式口語文体による Hemingway の小説文の入念読みなどを通し何かと思索しているのであるが、英・西対照研究の一環からも Hemingway 作品に関しては、スペイン語翻訳版のあるものは英・西バイリンガルで同時並行読みの手法をとっているためもあり、なお未読の長編ものがある。ただ、彼の全作品に通底する主テーマから、おおよそ見当はつけているつもりではいる。

Hemingway は若い頃からスペインや、アメリカ大陸のスペイン語圏の、特にカリブ海沿岸地域と何かと関わりをもった作家であり、作品中では言語としてはスペイン語も多く織り込まれる。アメリカ人でありながら、生涯 (1899-1961) の 1/3 の約 20 年間はスペイン語の国キューバでの生活と文筆活動であった。特にノンネイティブにとって文学作品の理解に語学的側面からの追究は欠かせないが、本稿は C. K. Ogden の Basic を絡めた、Textual / Discourse analysis (言説分析) による Interpretive semantics (解釈意味学) 的色彩をもつ Hemingway 文学・文芸批評となる。

なお、本稿で Basic という場合、拙稿 (2014a) で私案として提言した、語彙体系はあくまでも 850 (+ a) 語で、意味拡張により Basic 語彙の織り成す意味世界を拡大し、語感をさらに磨き上げることをめざす、やや上級レベルの仮称 Wider Basic (拡張 Basic) も基本的に含めていることを断っておきたい。

1. Theory of the tip of the iceberg (冰山の一角説) に基づく「言語明瞭／意味不明」な E. Hemingway 作品の Textual / Discourse analysis (言説分析)

Hemingway 文学は主観的、心理的感情を極力排除し客観的叙述のみをする。読み手に絵画を見るように視覚的に徹底的に見させ、情感をかき立てる文章スタイルである。書かずして、おのずと Empathy (感情移入) により読み手に共感を呼び覚ますわけである。ここに彼の文

学文体の英文と、時事文体の英文との接点を見ることもできる。

元来 Hemingway は時事文を書く新聞記者の出身で、海外（欧州）特派員であった。新聞業界の教に「10 取材して 1 書け」というものもあるようだが、その点では彼は文学作品のなかでまさにそれを実践した作家と言える。遺作で 1964 年発刊の長編小説 *A Moveable Feast* 『移動祝祭日』第 2 章で、彼自身が用いている言葉を引用すれば ‘one true sentence’ 「真実の 1 文」から始め、真に研ぎ澄まされた文を次々と連ねるスタイルである。

彼の作品言語は R. Flesch の Plain English を想起させるとともに、C. K. Ogden の Basic English との接点をも垣間見させるが、削ぎ落としの簡素なものである。同時に、作品が Theory of the tip of the iceberg（氷山の一角説）に基づく「省略の文学」である。氷山は少しだけ見える部分にこそ威厳があるという比喩が、この説の背景となっている。彼の有名なこの「氷山説」は、スペインの闘牛を題材とした長編小説 *Death in the Afternoon* 『午後の死』（1932）第 16 章にある次の一節が発端となり、広く知られるようになった〔破線・下線は筆者、以下同様〕。

- 1) If a writer of prose knows enough about what he is writing about he may omit things that he knows and the reader, if the writer is writing truly enough, will have a feeling of those things as strongly as though the writer had stated them. The dignity of movement of an iceberg is due to only one-eighth of it being above water. A writer who omits things because he does not know them only makes hollow places in his writing. —*Death in the Afternoon* (1932)

この一節が Hemingway 文学を最も端的に、そして象徴的に示すのに大変都合がよいので、これまで彼の作品に関して言及されるときにたびたび引用されてきた箇所である〔もちろん Basic 文ではないし、Wider Basic 文でもないが、本稿では何かと full English 文とのその接点を意識下においても見ていく〕。

最初の文の 2 つの about にも注目しておいてよいが、2 つ目の下線部で、氷山の移動に威厳のあるのはその $\frac{1}{8}$ しか表面に現われていなく、 $\frac{7}{8}$ が海面下に沈んでいて見えないからだと言っている。Less is more. 「より少ないほどより多い」の考え方に立ち、書かずに読ませ、書いてない部分が強く印象に残るよう書く作家が Hemingway である。

積み上げの構築ではなく、削ぎ落としの彫刻のようで、最小限で必要十分な条件を満たす最大公約数的な書き方と言ってよかろう。彼は氷山の一角としての $\frac{1}{8}$ を驚くほどきめ細かに書き、 $\frac{7}{8}$ は書かない。書き尽くせば分かりやすくはなるが、意味不明の部分の解釈を求め反復読みがしたくなるよう計算された書き方なのである。特に全短編集（70 編収録で 1987 年刊）を一言一句詳細に読み込むと、例外なくその特徴が把握できる。

Hemingway の作品を読み解く重要なキーワードの 1 つは、Nothing（無）と言える。これは新約聖書のないわゆる神の国の到来はないと説き、有名な言葉《神は死んだ》を残した 19 世紀のドイツの哲学者ニーチェ（F. W. Nietzsche）に代表される Nihilism（虚無主義）の思想とも重なる。特にパリ版 1924 年刊（アメリカ版 1925 年刊）の長編（短編集）*In Our Time* 『われらの時代に』の間章に収録された短い書き物や、短編 *A Clean, Well-Lighted Place* 「清潔で、とても明るいところ」（1933）などに、彼の思想を端的に見ることができる。

また悲惨な第一次世界大戦をテーマとした長編 *A Farewell to Arms* 『武器よさらば』（1929）

なども、Nihilism を代表する作品で簡素・簡潔な文体で書かれるが、彼の作品はやはり長編より短編のほうが、その作風と思想が顕著に手早く見てとれる。短編の上記書から次に引用する一節などは、彼の Nihilism そのものを示していると言えよう。

2) … What did he fear? It was not fear or dread. It was a nothing that he knew too well. It was all a nothing and a man was nothing too. It was only that and light was all it needed and a certain cleanness and order. Some lived in it and never felt it but he knew it all was nada pues nada y nada y pues nada. Our nada who art in nada, nada be thy name thy kingdom nada thy will be nada in nada as it is in nada. Give us this nada our daily nada and nada us our nada as we nada our nadas and nada us not into nada but deliver us from nada; pues nada. Hail nothing full of nothing, nothing is with thee. He smiled and stood before a bar with a shining steam pressure coffee machine. —*A Clean, Well-Lighted Place* (1933)

驚きの内容である。この作品のほぼ結末部分の一節で、虚無主義（ニヒリズム）の極めつけと言えよう。すべてを Nothing（無）として、新約聖書マタイ福音書（第6章）やルカ福音書（11章）の Lord's prayer〈主の祈り〉をもじって書かれてもいる。文中 nada という語がいくつも散りばめられ、Hemingway の文体に特徴的でもある Tautology（同語反復）の書き方となっているが、nada はスペイン語であり nothing の意味である。

この主の祈りを *The Bible in Basic English* (1949) でシミュレーション化してみると Father（神）、heaven（天）、holy name（聖なる御名）、sin（罪）、kingdom（天国）、earth（地）、pleasure（主の慈悲）、daily bread（日々の糧）、Evil One（悪魔）など、すべてが抽象的概念として否定され、人間も、Lord's prayer そのものも、完全に否定されることになる（イタリック体はすべて Basic + a 語彙）。一神教のキリスト教を完全ナンバー「1」で象徴するとすれば、それが全否定され無神教の「0」となり、無常の仏教的世界観さえ想起させる。

Hemingway は第一次世界大戦中に戦地イタリアで負傷もし、人生の方向を見失った Lost generation（失われた世代）の人間で、抽象的概念をことごとく嫌い客観的具象のみを重んじ、キリスト教にも懐疑的であったことは知られるが、ここでも簡素な文体に象徴性が含まれていて意味解釈は難しい。なお nada = nothing に関しては彼の上記、遺作の *A Moveable Feast* 『移動祝祭日』(1964)の最終章でも、Nada y Pues Nada とスペイン語での章題の下で扱われている。

一方、この節では明るい光 light、そしてある種の清さ cleanness (= being clean) と秩序 order が必要だと対比・対照的に言うので、旧約聖書冒頭書き出し部分での、世の暗黒とカオス（混沌）の状態のなかに明るい光がもたらされる記述、さらに Adam と Eve による原罪以前の汚れのない秩序ある世の記述までは肯定的かとも読める。ただし、光に関する旧約冒頭の記述 Let there be light. 「光あれ」は神自身の発した御言（おげん）であり、その神を Nothing と言うのであれば、Hemingway にとってのこの光は救いの光ではなく、いわゆる物理的な光とも解釈できる。

最後の文中の a shining steam pressure coffee machine（輝く蒸気圧コーヒー機器）とは「エスプレッソ（Espresso）のコーヒー沸かし器」に違いないが、それがキラキラと明るく輝いているのである。ここではこれが光の象徴として描かれている。こういうところでコーヒー沸かし器のような無機質な具体的モノに視点を定め、抽象性を具体化するのはいわゆる彼の書き方技法で、

視覚からさらにコーヒーの味覚や嗅覚まで呼び覚ます描写法でもあると言えよう（これに関しては第2節の末尾でさらに少し付け加えることがある）。

簡素・簡潔な文体である一方で、作品の末尾で唐突な締めくくりとし、「言語明瞭／意味不明」とするのが彼の書き方手法であり、その意味解釈は読者側に委ねられる。上の短編作品の一節は Hemingway 文学の特徴がよく出ている。

冒頭「はしがき」でも触れたが、彼の作品言語は文中に特にスペイン語などのロマンス言語を頻繁に採り入れる。各作品の意味解釈はその文体とは裏腹に、意外に難しい。Vulgarity / Obscenities（卑猥語）がほほどの作品にも頻出し、性描写が驚くほど多くなされ、これがノーベル文学賞受賞作家によるものか？という印象さえ与えるほど、まるで例外なく特異である。

表面的には男性的で、hardboiled（ハードボイルド）であり、non-sentimentalism（非感傷主義）的な、飾り気のない simple（簡素）な、dry（率直）な文体で、いわゆる美辞麗句を散りばめた豪華絢爛たる文体による品性の漂う類の文学作品とは異なる。主観的・内面的心理描写をまるで排し、風景や人物の言行の客観的・外面的な描写ばかりである。

and を多用する地（じ）の文と対話文により、全体がリズムカルに流れ躍動する。多分に2項を対比・対照する、いわゆる Counterpoint（対位法）を用いた音楽的旋律をもつ。省略の一方で、Refrain（繰り返し句）も意図的に多用され、散文が音楽的で詩的な味をかもし出す。文脈上で直接的には無関係で、一見雑多に思える情景をきめ細かに描写し連ねるが、Redundancy（冗長）に思えて実はこれが読み手に感情を投射する。

すでに触れたが、Hemingway の作品理解には彼が第一次世界大戦を戦地で実体験した人間であり、その時代のアメリカ社会とともに、第二次世界大戦へと至る世界情勢を背景に読まれねばならない。共和政府（人民戦線内閣）に対し、F. Franco 将軍が率いたファシスト軍部による反乱が契機となったスペイン内戦（Spanish Civil War）[1936-39]と、つづく第二次世界大戦（1939-45）では彼は新聞記者として従軍し、取材していたことも特別な意味をもつ。彼の作品はすべてこのあたりの事情を背景とする。

長編 *For Whom the Bell Tolls* 『誰（た）がために鐘は鳴る』（1940）は全編がまさにスペイン内戦がテーマである。上記 R. Flesch 風の Plain English の Readability（読みやすさ）の基準からすれば、文体上は Hemingway の作品には例外的なやや難しいものと言えるが、意味解釈は易しい部類に入る。その点では特異である。一般に彼の作品は読みやすいが、意味に象徴性があり解釈が難しいのである。

氷山理論としての $\frac{7}{8}$ が書かれていない Hemingway の省略の文学は、意味解釈の文学と言ってよい。彼は書かずに読ませる作家だと先に言った。文体上での外的簡素さとは裏腹に、意味上での内的複雑さをもっていて、多くのものが詰まった作風（compact style of writing）であるがゆえ、言語は明瞭でも意味は不明・不透明（opaque）となる部分が多い。特に結末の下りは象徴性に富む思わせぶりの含みとなり、必ず意味不明となると言ってよい。読み手は結末部分で断崖から突き落とされたような感覚をしばしば味わうが、あえてそのように意図的に書かれる。ここにも読み手に意味を熟考させる不思議な魅力がある。

上の2)も、ほぼ結末でのそういう例であった。次に彼の生前最後となった長編（中編）で、一般によく知られる作品 *The Old Man and the Sea* 『老人と海』（1952）から、最後の結末がやはり「言語明瞭／意味不明」となる言説例を提示する。

3) That afternoon there was a party of tourists at the Terrace and looking down in the water among the empty beer cans and dead barracudas a woman saw a great long white spine with a huge tail at the end that lifted and swung with the tide while the east wind blew a heavy steady sea outside the entrance to the harbour.

“What’s that?” she asked the waiter and pointed to the long backbone of the great fish that was now just garbage waiting to go out with the tide.

“Tiburón,” the waiter said. “Esshark.” He was meaning to explain what had happened.

“I didn’t know sharks had such handsome, beautifully formed tails.”

“I didn’t either,” her male companion said.

Up the road, in his shack, the old man was sleeping again. He was still sleeping on his face and the boy was sitting by him watching him. The old man was dreaming about the lions. —*The Old Man and the Sea* (1952)

名作として知られる壮大なカリブ海・メキシコ湾を舞台に、終始勇壮な海釣りを扱うこの作品の最後の幕切れはこれである。彼の作品は魚釣りを題材にしたものが多く、釣り文学とか、また老人を扱う作品が多いので、老人文学のように思われたりするかもしれないが内容は若さに満ちている。釣りには水面を境にその上の世界と下の世界、また老人の対極に青年が意識され、やはり上記、2項対立の対位法とも考えられる。そしてそれとは別に、言語明瞭・意味不明で何かが象徴的に含ませている。

かつて筆者は初めてこの幕切れの下りを読んだとき、文脈上の流れから突然突き放された思いに駆られたことを覚えている。文体は平易でも、意味が不透明で意外と難しい。同時にそのとき、これをイエスの張り付けと処刑の場面を直感したのであるが、やはりよくは理解できなかった。この最後の一節は次のような解釈はどうだろう？筆者独自の解釈法であるが、そう考えるとここでの言説が一挙に意味をもつ。これは単なる釣りに関するストーリーではない。

老人がメキシコ湾沖での壮絶な闘争の末に捕えた marlin (カジキマグロ) であったが、それが shark (サメ) に食われ残骸となったのである。浜辺に置かれていたそのカジキマグロの残骸を、バル (居酒屋) のウエーターの曖昧な説明でサメと見間違えた a woman (一人の女性) が、その尻尾の美しさを賛美している。文中の tiburón はスペイン語の tiburón (サメ) のことで、ここではこれをウエーターが Es un tiburón. (= It is a shark.) というスペイン語と、英語の shark を混同したような Eshark (< Es + shark) という妙な言い方をしたと考えてよからう。

Hemingway の作品は一見何気ない、また無駄な書き方に思われるところにも常にそれなりの意味がある。この会話で2言語 (ここでは英語とスペイン語) が交差するのも何かの象徴性はないか？また、そもそもこの作品に女性っ気はまるでなく、ここで初めて前面に登場するのがこの女性なのである。なぜ大勢の人のうちで、女性が最初に登場するのか？女性であることに、何か特別な意味があるのか？次に her male companion (仲間の男性) が現れる。ここでは spear (ヤス・ヤリ) で刺され、背骨と尻尾だけになったサメに見えるカジキマグロを、2人とも賞賛していることになる。

そもそも fish (魚) は、古代以来西洋ではキリストの象徴でもある。12使徒の多くも元は漁夫であった。ほぼこれだけからも、カジキマグロとヤリで刺された十字架上のイエスの姿とそ

の栄光を改めて賞賛し、見物している女性ら何人かの人々が最初の下線部 a party of tourists (一団の観光見物人) と重なるような気もしてくる。この人々のなかには、ローマの軍人の姿もイメージ的に見えてくる。

時間的には That afternoon (その日の午後) とあり、これは聖書記述のイエスの死の時間帯とも重なる。場所が海岸の段丘にある店 Terrace (テラス) となっているが、イエスの受難の地であるエルサレムの丘 Golgotha [ゴルゴタ: 別名 Calvary (カルバリ)] と重なる。そしてさらにこれを見守っている the boy (青年) がいる。特にイエスの受難のときこの場にいた女性は、新約マルコ福音書などの記述から確認できる。これを上記 Basic 聖書により次に 3)' として見てみる。

3)' And there were women watching from a distance: among them were Mary Magdalene, and Mary, the mother of James the less and of Joses, and Salome, who went with him when he was in Galilee and took care of him; and a number of other women who came up with him to Jerusalem. (*Mark* 15:40-41)

いずれもよく知られる3人の女性で、それが2人の Mary (マリア) と、Salome (サロメ) だったとはっきり名指しされている。やはり上の3)の女性は、何かとイエスに最も近い存在であった Mary Magdalene (マグダラのマリア) であると考えられないか? 新約福音書はこれにつづいて、ローマ総督 Pilate (ピラト) にイエスの遺体を受け取ることを願い出て、埋葬した Sanhedrin (ユダヤ最高法院) の裕福な議員 Joseph of Arimathea (アリマテアのヨセフ) という男性について言及する。上記、仲間の男性 (male companion) が見え隠れする。

また、ここではローマ側の Latin (ラテン語) と、ユダヤ人の Aramaic (アラム語) の2言語が聞こえてくるような感じも覚える。さらに福音書記述は、埋葬を見守った女性たちが3日後にイエスの墓へ行くと墓石が取り外されていて、中に a young man (一青年) がいて『イエスはこの墓にはいないが生きている』と言う。これはイエスの Resurrection (復活) の証言者となる青年と、作品中で釣りをする老人を常に見守っている the boy が重なる。

先の2)の作品ではキリスト教を完全に否定した書き方さえした Hemingway であり、上記3)と聖書記述を重ねるのは恣意的解釈に思えるかもしれないが、状況的にはまるで符号する〔女性という点で付け加えておくが、彼はこの作品の他の箇所では Lord's prayer (主の祈り) ではなく、Hail Mary (Ave Maria) (聖母マリアの祈り) のほうに関心のあるような言説もしている〕。まだ他にここでは触れないが、聖書記述と重なる象徴的な箇所がある。

また最後の締めくくり文で、老人が見ていた lion の夢はカジキマグロとの闘いのあとも、なお不屈の精神でアフリカでのライオンとの闘いに挑むことが暗示される。これも「死んでも死なない」イエスの復活と重なりと解釈できないか?

この作品は、公的メディア機関から No page of this beautiful master-work could have been done better or differently. —*Sunday Times*—とか、私的に Every word tells and there is not a word too many. —Anthony Burgess—などと評されてもいるが、他により良い書き方もなく、余分な語も一切ない(まさに聖書文のように)のであれば、文中の浜辺に浮く empty canned beer and dead barracudas (ビールの空き缶と死骸となった魚のカマス)なども、何の意味があるのか?

一見、無意味で不必要のような情景・状況描写により、イメージを鮮明にするのが

Hemingway の書き方である。ここでは空き缶と魚の死骸という、注目に値しないようなモノをあえて視覚に取り込むことで、その後ろのカジキマグロの残骸の姿のもつ威厳をきわ立たせる書き方技法（上記、対位法）にも思える。empty と dead の 2 語も、何か空虚で虚無主義的な象徴性を感ずるがどうだろう。やはりすべて意味があり、計算された必要な状況描写法だと解釈したい。

そしてさらに、主人公の老人 (Santiago) が sea (海) を愛すべき女性の象徴と見ていることを、相棒の少年 (Manolo) に語る形で触れている点にも注目しておきたい。次がその箇所である〔中略は筆者〕。

- 4) He always thought of the sea as *la mar* which is what people call her in Spanish when they love her. ...Some of the younger fishermen... spoke of her as *el mar* which is masculine. They spoke of her as...even an enemy. But the old man always thought of her as feminine and as something that gave or withheld great favours, and if she did wild or wicked things it was because she could not help them. The moon affects her as it does a woman, he thought. — *ibid.*

これも興味深い言説である。3つの下線部で《mar (海) を愛する人はスペイン語でこれを女性と考え、女性定冠詞 *la* とするが、この老人も海を女性と見なし、*la mar* と考えてきた。若い魚師のなかには海を敵とさえ考え、男性扱いとし、男性定冠詞 *el* を用いて *el mar* と言う者がいる。(しかし) この老人にとって海はやはり女性であり、大いなる恵みを与えたり与えなかったりするもの、と常に考えてきた。月が海に作用するのであり、それは月が女性に作用するのと同じだ》と言っている。

語法的にスペイン語では *mar* (= *sea*) は男性名詞と女性名詞に両用され、特に抽象的な海は女性名詞扱いで *la mar* となる。その点では特異な考え方ではない。興味深いのは中略した部分もあるが、ここでの Feminism (フェミニズム) 的な言説内容である。先の 3), 3)' の関わりで触れた聖母マリアの祈りとも重なるが、Hemingway の女性を愛し賛美するフェミニズムの男女同権論の立場が、月を引き合いに出すことで語られている。

これは先の 2) に関連して触れた「原罪」を最初に犯したのは女性の Eve であることから、伝統的カトリック教会の信条が男尊女卑的、父性愛的であるとし、それに批判的である彼の姿勢が見え隠れするようにも思える。海 (*sea*) が荒れることなどあるのは、月 (*moon*) の支配によるものだと説くが、キリスト教国では、月は *the Virgin Mary* (聖母マリア) の象徴でもある。なおスペイン語で月は *luna* で、やはり女性名詞である。またラテン語起源の英語の *lunatic* 「狂人 (の)」もこの月から来ているが、しばしば一時的に正気を失うのは月の影響によるという考え方が背景にある。

このあたりは上文で下線は施さなかったが、2つ目の下線につづく文が意味的に重なる。すなわち、海 (女性) もしばしば荒れ狂ったり、災をもたらすことはあると掛けた形となり、見事に重なる。月と女性 (*her*) の関係をいう 3つ目の下線部 *The moon affects her as it does a woman.* は、女性の生理現象である月経 (*menstruation*) が月の作用だという含意も間違いなくある。なお、ラテン語起源の英語 *menstruation* は、スペイン語では *menstruación* で女性名詞である。ただし同語源で、いわゆる時間的な月 (*mes* (= *month*)) で男性名詞である。

いずれにせよ 4) の言説も何かと含意ある象徴性に富むもので、さらなる意味解釈はやはり各々読み手側に委ねられることとなる。上で *fish* (魚) がキリスト教国ではキリストの象徴と

なることに言及したが、同時にこの作品で老人の乗る舟に関して言えば、キリスト教国ではそもそも boat (舟) はノアの方舟 (はこぶね) や、その形をした教会の象徴でもあり、神による救いを意味することも付け加えておきたい。

また、Hemingway はカリブ海を舞台とした彼の死後 1970 年に発刊された長編 *Islands in the Stream* 『海流の中の島々』では、舟と同じように house (家) を女性と考える男性を描いているが、スペイン語では小舟 (barca), 家 (casa) はともに女性名詞である。中米の特にキューバを愛した Hemingway であるが、首都ハバナもスペイン語では La Habana と言い、女性定冠詞 la の付く都市である。何かと彼と女性の関係は特別で、それがこの作品での言説からも察知できる。

文学作品の言説は解釈がいくつも可能であり、確定的な意味は存在しないとする理論に Deconstruction theory (脱構築論) [deconstruction (< destruction+construction)] があるが、これは Post-Structuralism (現代的ポスト構造主義) 的な Literary criticism (文芸批評) として注目に値する。脱構築論は、文字 (もじ) と化した言語 (written language) による文学作品の解体と復元による意味解釈法であり、1960 年代にフランスの Derrida, J. (1930-2004) により創始された。この理論では、言語が主で人間が従の関係 (その逆ではなく) となる。

2. E. Hemingway の絵画的自然・情景描写に見る HERE / THERE の Deixis (直示法) と、Basic / Wider Basic における Deep sememe (深層意味素) : <BE - HERE / THERE - AT (WITH)>

前節では E. Hemingway の作品 (小説) の特徴ある簡潔で簡素な書き方手法と、末尾の幕切れで含みがあり意味が不明・不透明となる点について触れたが、本節では特に書き出し部分に焦点を移してみたい。同時に Basic との接点についても考えてみたい。

Hemingway の作品における冒頭や各節での書き出しの顕著なパターンは、映画 (映像文学) の幕開け部分のようにまずは静かな〈情景〉の一コマが提示される。しばらくこれがつづき、それからその中におもむろに現われる 1 人の〈人物〉の登場、そして次にその人物の何かの〈行動と状況〉が映し出されるという形で展開する。その具体例を長編 *A Farewell to Arms* 『武器よさらば』(1929) から次に提示してみる (この作品も映画化された)。第一次世界大戦中のイタリアが舞台となっている [下線・破線は筆者、以下同様]。

- 1) In the late summer of that year we lived in a house in a village that looked across the river and the plain to the mountains. In the bed of the river there were pebbles and boulders, dry and white in the sun, and the water was clear and swiftly moving and blue in the channels. Troops went by the house and down the road and the dust that they raised powdered the leaves of the trees. The trunks of the trees too were dusty and the leaves fell early that year and we saw the troops marching along the road and the dust rising and leaves, stirred by the breeze, falling and the soldiers marching and afterwards the road bare and white except for the leaves. — *A Farewell to Arms* (1929)

これがこの長編小説のまさに第 1 章書き出し部分であり、文中に 15 個の and が用いられるいわゆる Polysyndeton (接続詞 [連辞] 畳用) の一節である。接続詞畳用は聖書文などに代表されるが、音韻的にもリズムカルになり、黙読でも聴覚を刺激する。聴けば躍

動感のある素朴な響きとなる。これが彼の Literary style (作品文体) であり, Rhetorical grammar (修辞文法) 的にも簡素・簡潔さの趣を感じさせる源泉となっていると言える。また, Phonostylistics (音韻文体論) 的にも注目に値する。平易な文で淡々と飾らず書かれ風景・自然描写がなされている。やはり上記, 映画の幕開け場面での映像がイメージ化される。

——《村の中に建つ一軒の家屋／後ろに流れる川と平原／遠方には山々がそびえている／近景にもどり川の映像／その川床に見える小石や岩石／太陽に照らされそれが乾き白く見える／水は澄んでいて流れが速くいくつも水路ができていく／水は青く見える／つづいて軍隊の姿が見えだす／家屋のそばと道路沿いを通り過ぎていく／彼らが通ると木の葉に塵埃が降りかかっている／木の幹まで埃がついている／木の葉がその年は早く散っていく／軍隊の行進とともに似た光景がまたもつづく／木の葉が微風で揺れている／彼らが過ぎ去っていく／見ると道路がむき出しとなり白くなっている／木の葉はそうでもないように目に映る》——

Hemingway の自然・情景描写法は, 特別に絵画的だと言える。同時に, 巧みに視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の五感に鋭く訴える書き方技法を用いる。ここでは戦地イタリアでの風景が視覚的に色彩化され, 水の音や軍隊が行進する靴の音からは聴覚, 木の葉や幹に塵埃がこびりついた様は視覚から触覚も呼び覚まされる。晩夏のそよ風は触覚, さらにそれが嗅覚をも刺激する。彼の作品中には飲食物 (特に酒) が頻出するが, ここでは川・平原・山の自然の中での軍隊の行進描写であり, 飲食物を介する味覚はないにせよ早くも第2章ではそれが現われる。この節は飲食物なしでも, 味のある書き方そのものが味覚にもなっていると言えようか。

Syntax (統語法) の面からは, 最初の破線部 looked across the river and the plain to the mountains では across の後ろの the river and the plain が「経路」で, to の後ろの the mountains が「着点」である。これは一種の Way-constructions ('way' 構文) で, 移動の Source (起点)・Path (経路)・Goal (着点) の道程描写表現である。ここでは a house in a village が起点となる。Hemingway は情景描写を多用するので, 必然的に 'way' 構文が頻出する。この構文では Spatial particle (空間不変化詞) が縦横に現われるが, ここでは across と to がそれである。

2つ目の破線部 In the bed of the river のような副詞句の前置は知覚の順序や視点の移動と関わるもので, 情景描写法としてのさらなる注目点である。この場合 the river はその前で既出であり, 情報提供上は Given information (既知情報) となる。したがってこの副詞句は前置されている。こういう語配列法は Hemingway の作品文体に限ったことではもちろんなく, 英文の語句整序法上で一般的なものであるが, 彼の作品は観察力鋭く風景・情景描写ばかりするという点で頻出する語配列法である。3つ目以下の破線部はいずれも基本的に同類の英文叙述法と言え, やはり風景・自然描写での典型的なものである。

上で接続詞 and を多用する Polysyndeton (連辞畳用) について触れたが, ここではこれら3つの破線部の表現法などもすべて広義での Polysyndeton であると筆者は見なしたい。そうすることで英文整序法上での種々雑多な側面の見方が簡素化, 簡潔化され意味的にも透明度が高まると考えるからである。すなわちいわゆる接続詞, 関係詞, 空間不変化詞 (特に付帯状況を言い表す with) など, また, oh, er...well, you know, like...uh, you see, etc. の言い淀みで発せられる Filler (充当詞) なども含め, すべてこれらは Discourse marker (言説・談話標識) であり, これまた広義の Copulative / Connective (合接詞) で Syndetic (連辞法) と見なしたい。

具体的には3つ目の破線部 *dry and white in the sun* は、前に *which were* が省略されたものであるし、4つ目の破線部 *the dust rising and leaves, stirred by the breeze, falling and the soldiers marching* は *rising* の前に *which was*, *stirred* の前に *which were*, さらに *marching* の前に *who were* がいずれも省略され、Asyndeton (連辞省略) の文として連ねられている。そして最後の破線部 *the road bare and white* では、*bare* の前に *was* が省略される形での語配列法で、いずれも形容詞 A が Predicate (叙述用法) となっている。ここで共通項として見えてくるのが主部と述部をつなぐいわゆる Copula (連辞・繫辞 (けいじ)) としての *be* であり、これを Deep sememe (深層意味素) 表記で 〈BE-AT(WITH)〉とし、Hemingway 作品の意味的不透明さとは別に統語的簡素さの大きな秘密の1つと考えたい。

Basic / Wider Basic も 〈BE-AT(WITH)〉の言語と言え、その点では Hemingway の文とも1つの共通点が見出せる。簡素な文は HERE / THERE と関わる Deixis (直示法) から、すなわち意味素的に 〈BE-AT(WITH)〉から来ると言える。これは 〈x BE HERE / THERE AT(WITH) y〉と表記できようモノ・コトの状況やあり方の、位置づけである。Motion event (移動事象) としての Source (起点)・Path (経路)・Goal (着点) の観点からは、もう1つ 〈w GO / COME FROM x TO y BY WAY OF z〉が設定できる。このあたりとの関わりから次に冒頭書き出し部分ではなく、前節で特に焦点をあてた末尾の言説を見してみる。次の2)は、上の1)の第一章冒頭書き出しの節の最後の末尾での言説で、これをもってこの第一章は終わる。

- 2) At the start of the winter came the permanent rain and with the rain came the cholera. But it was checked and in the end only seven thousand died of it in the army.
— *ibid.*

下線部は Hemingway らしい文末で含蓄をもたせる締めくくり方であり、しばしば引き合いに出される箇所でもある。やはり感情はあえて書かずして読み手にそれを投射する。

ここではまず破線部中の *at the start of the winter* と *with the rain* に触れておくと、それぞれ上の1)と同じように副詞句が前置されている。前者は文脈上から季節が晩夏から秋を経たあとの冬に言及するわけで、*at the start of the winter* と *winter* が先に配置される語句整序法である。それとともに Inversion (倒置法) が起こり、動詞 V の *came* と主語 S の順に配置される。後者も同じで、*rain* はすぐ前で語られ旧情報となり既知項として副詞句が前置され、やはりそれとともに倒置法が用いられ、これで *and* を挟んで前者と後者の文中の *rain* が近づけられた配置となる。これら2つを倒置の V + S ではなく S + V とすると、英語としてきわめて不自然となる。

「近いものは近づけよ」が英語統語法上の鉄則で、卑近な例ではたとえば *What is it? It is a book.* などにも如実に現れる。未知な項 X がまず *What* と置かれ *What is it?*, そしてその返答では知覚的に既知となった *it* が前置されることで、2つの *it* が互に近づく。項の前置は必ずしも強調ではなく既知項としてむしろ意味的には弱く、文尾で未知項の New information (新情報) が強められた形で End-focus (末尾焦点) となるのが典型である。こういう場合 *It is* がしばしば省略され、単に *A book.* として実現するのも自然である。

さらに下線部の *But it was checked* の *it* は、前の倒置文により、すぐその前の破線部の *cholera* とやはり近づけられていることになる。下線部の意味「しかしコレラの蔓延は阻止され、最終的に軍隊ではわずか7,000人が死亡しただけであった」は痛烈である。

この and only seven thousand の only という 1 語が、またも彼らしい書き方となっている。7,000 人も軍人が死亡したことを彼は単に only として、主観的感情を抑えた事実報道のように書いている。その意味はどこか不明・不透明となり、ここで読み手側の感情が高揚する。 $\frac{1}{8}$ のみをきめ細かに書き $\frac{7}{8}$ を書かず、一言一句が研ぎ済まされる書き方技法として前節での「氷山」説を、ここで改めて確認しておきたい。

同時に 2) の文の背景に、やはり意味素としての〈BE-AT(WITH)〉がある。ここでは概略、〈winter BE THERE〉→〈rain BE THERE〉→〈cholera BE (NOT) THERE〉→〈death BE THERE〉のような意味として示されよう。論理哲学的には Deictic category (直示範疇) となるが、Locative (位置格) に注目するいわゆる Localistic theory (場所理論) とも関わる。

Hemingway の若い頃の新聞記者としての経歴からも、その全作品の書き方 Style は主観を排した事実報道的な Journalistic style (ジャーナリズム文体) の趣が感じられるとともに、ミステリー文学風のサスペンスの風味も加わっていて読み手を最後まで引っ張っていく。ただしミステリー小説とは逆に、末尾での結末の言説がとかく意味不明・不透明に終わるのである。特に短編作品で自然風景、人物の動作、事の状況をそこまで書く必要があるのかと思えるほどきめ細かに描写する。終始読み手に緊迫感を与え、最後の幕切れでほぼ必ずと言ってよいある種の象徴性を含ませ意味的に不透明とし、読み手にその部分の意味解釈を委ね、情感をかき立てる。上の 2) は、ほんのその 1 例である。

次に末尾ではなく、やはり冒頭書き出し部分の例を、前節で言及した長編 (短編集) *In Our Time* 『われらの時代』〔アメリカ版〕(1925) の間章 Chap. XII から引用する。

3) If it happened right down in front of you, you could see Villalta snarl at the bull and curse him, and when the bull charged he swung back firmly like an oak when the wind hit it, his legs tight together, the muleta trailing and the sword following the curve behind. Then he cursed the bull, flopped the muleta at him, and swung back from the charge, his feet firm, the muleta curving and at each swing the crowd roaring.

... Villalta became one with the bull and then it was over. Villalta standing straight and the red hilt of the sword sticking out dully between the bull's shoulders. Villalta, his hand up at the crowd and the bull roaring blood, looking straight at Villalta and his legs caving. — *In Our Time* (1925)

Hemingway はスペインで闘牛を見るのが好きであったので、作品にはこれを題材にしているものも多いが、ここでの闘牛士ヴィジャルタと牛の闘いの模様も先の 1) とまるで似ていて、知覚の順序に応じ刻々と細かにイメージ的に伝える情況描写法である。まさに彼が好んで用いる絵画的書き方である。視・聴・触など五感にも訴える。名詞 N + 〈形容詞／副詞／現在分詞 -ing 接辞／空間不変化詞〉などによる、いわゆる Attendant circumstances (付帯状況) 的な描写である (ここでは名詞 N + 〈完了分詞 -ed 接辞〉の例は、たまたま現われていない)。

たとえば、最初の下線部の his legs tight together は、前に with が省略された形で名詞 N の状態をいうが、ここでの下線部はすべて 1), 2) で確認した Copula の be, すなわち〈BE-AT(WITH)〉から来ている。その点では〈BE-AT(WITH)〉言語である Basic English はこういう状況描写には強いことになる。特にまた Basic / Wider Basic は -ing, -ed 接辞と Spatial

particle (空間不変化詞 SP) に比重のかかる言語であり、名詞 N + 〈-ing/ -ed/ SP〉による状況描写にこれまた強いわけで、Hemingway の言語 (英語) と Basic / Wider Basic の接点として見出せる部分である。この部分に焦点をあてれば両者が一体化して見えてくるように思える。

やはり広義での先の Syndeton (連辞法) の問題となると言えようもう 1 つの文頭書き出し部分の具体例を、同作品の別な章 (Chap. XIV) から引用し、Hemingway 言語に特徴的なパターンを確認してみたい。

- 4) Maera lay still, his head on his arms, his face in the sand. He felt warm and sticky from the bleeding. Each time he felt the horn coming. Sometimes the bull only bumped him with his head. Once the horn went all the way through him and he felt it go into the sand. ... Then the bull was gone. Some men picked Maera up and started to run with him toward the barriers through the gate out the passage way around under the grandstand to the infirmary. They laid Maera down on a cot and one of the men went for the doctor. — *ibid.*

これも闘牛を扱ったもので、やはり文体が簡素・簡潔であるとともに、躍動的でリズムカルに動きをとらえた臨場感あふれる絵画的な描写であることが分かる。同時にやはり直示的な文の羅列となっている。最初の 2 つの下線部は with の省略された形式で付帯状況の並置となっているが、〈x BE HERE / THERE AT(WITH) y〉の直示法である。それぞれ〈his head BE THERE on his arms〉、〈his face BE THERE in the sand〉のような〈BE〉と〈THERE〉を介したモノの位置づけでもある。3 つ目以下の下線部はいずれも移動事象で、空間不変化詞 SP が用いられている経路描写であり、重層複合的に現われる先のいわゆる‘way’構文も見られる。

‘way’構文では‘way’が明示的に現れるとは限らず、SP が複数個並列される Multiple spatial structure (重層複合型) はすべてこの範疇に入れてよいと筆者は考えているが、all the way through と way around under は‘way’が明示化された例である。4) の全文は、映像的には動きのある迫りに満ちた動画であるが、じっくり見るため一時停止をかけ静止画にしてみるとどうなるか？すべて Copula の be を用い状態・様態としてみると、次の 4)’ のようなものとなろう。

- 4)’ Maera was lying still. His head was on his arms. His face was in the sand. He was warm and sticky. He was bleeding. He was feeling the horn was coming. The bull was bumping him with his head. The horn was going all the way through him. He was feeling the horn was going into the sand. The bull was gone. Some men were picking Maera up. They were starting to run. They were with him. They were running toward the barriers. They were running through the gate. They were running out the passage. They were running way around under the grandstand. They were running to the infirmary. They were laying Maera down. He was on a cot. One of the men was going for the doctor.

これは原文の 4) にできるだけ忠実に従ったもので、もちろん Basic / Wider Basic 文ではないが、こういう考え方の手順を経て意味を理解することで Basic や Wider Basic に限りなく近づける表現上の手法もある。4) では be は、He was gone. の文中に 1 つ具現化しているの

みであるが、4)'では20倍を超える23個のbeが浮上した形になる。4)'のようなCopulaを橋渡しとする変換法を特別にCopulative sentence transformation (CST)〔連辞(繫辞)文変形〕と呼んでおきたい。

彼の言語はbe, すなわち意味素〈BE-AT(WITH)〉を特別に多く含んでいて、-ing, -ed接辞に強く依存した、やはり〈BE-AT(WITH)〉の言語と言えるBasic / Wider Basicとの接点がこれで検証されよう。特に4)の文中での... and started to run with him toward the barriers through the gate out the passage way around under the grandstand to the infirmary. という、「起点」から「経路」を経て「着点」への、英語の母国語話者が難なく使いこなせる移動描写法に日本人は慣れる必要がどうしてもある。この文の意味は4)'のCST変形で透明化される。

英語に特徴的なこういうSP(空間不変化詞)の現われ方を見るため、この作品のスペイン語翻訳版で対照し確認してみると... y echaron a correr con él hacia la barrera, se metieron en el portal y siguieron el pasillo en curva que iba por debajo de la tribuna hasta la enfermería. となっているが、英語のtowardとtoはそれぞれhacia, hastaで、英/西で単純に語の置き替えとなっている。through, out, way around underはそれぞれse metieron (< got in), siguieron (< kept on going), en curva que iba por debajo de (< went (a) round under)と動詞Vによる言い方に変換されていて、空間移動の英/西による表現法上の相違を垣間見るが、日本人にとっては動詞Vの中に組み込まれ吸収される形になるスペイン語の思考型のほうが楽と言える。

また4)を4)'のようなCST変形の手順を踏めば、意味理解が容易になる。4)⇒4)'と、逆の4)'⇒4)の相互変換で文を見ていけばよい。なお、そもそも英語の空間不変化詞SPは、後ろの名詞Nを叙述的な形容詞Aとするか、または状況補語的な副詞ADとする働きを担う。したがって上で見た深層文〈x BE HERE / THERE AT(WITH) y〉は、表層上には一般に[N + be + A / AD]として実現する。

付け加えておくと、Hemingwayの作品(小説)言語は簡素で感情は抑えるといえども、長編でたとえば1926年刊の*The Sun Also Rises*『日はまた昇る』などは、目に見える自然・情景・人物の行動の場面描写ばかりではなく心理描写もそれなりにある作品であるし、短編(中編)では、遺作で1987年に公になった*The Strange Country*「異郷」などもそうである。感情表示は別途〈x BE HERE / THERE IN y〉[y = ONE'S MIND (HEART)]などとして示されよう。

彼の作品文体は写生風で、まさに観賞用絵画を文字にした感じであるが、18～19世紀のスペインの画家F. de Goya (F. ゴヤ)や、19世紀半ば～20世紀初頭のフランスのポスト印象主義の画家P. Cézanne (P. セザンヌ)などから影響を受けたことが知られている。P. Cézanneの風景画「サント・ヴィクトワール山」(仏: Le Monte Sainte Victoire)は、フランスの山村を描いた簡素な図画風の絵画で、ひからびた自然・情景描写は日本的なワビ、サビさを感じさせる。Hemingwayの文体は日本の連歌・俳諧などの清澄さ、また清流のイメージももたせる。その点ではLyricism(叙情性)の極力排除された風物詩的な言語により散文とされたものとも言える。

彼の作品には語としては、英語民族にとってある種の情感をそそることにもなるBasicにおける+a語のうちのVerse words(韻文用語)100語の表出する比率はやはり少ない。1文1文そのものの叙述、描写法が明確である一方で、ストーリー性という点ではその輪郭が不透明

と言えるが、特に短編の文体の簡素さは Basic / Wider Basic のそれと似た趣ともなる。その自然・情景描写法から上記 Deixis (直示法) の〈HERE〉〈THERE〉と、空間不変化詞 SP による英語思考法が見える。

また、彼の扱う主題 (モチーフ) は戦争が前面に多く出て、〈生 (L)〉〈性 (S)〉〈死 (D)〉の3つ (LSD) に集約できそうに思える。まるで薬物さながらに、五つの感覚神経 (五感) を刺激する辛辣 (しんらつ) で酸性 (acid) な LSD 主題が作品を超え、間テクスト的 (intertextually) に常用され、同じ語彙・言い回しが何度も現われる。したがって全作品を読み解く key word が何十個と抽出でき、その母集団が浮き彫りにされる。その key word の多くは Basic 語彙とも一致する上位概念語で、本稿引用節中からだけでもいくつか拾える。Hemingway にとって主題〈L〉の衣・食・住での「衣」に対する興味、「食」では驚くほど旺盛な食欲が示され特に飲酒の描写が頻出し、「住」では多くは各地のホテル・立ち寄るバー・カフェが舞台となる。また〈S〉はあらゆる形態のものが、かなり露骨に描写される。彼は原稿書きに加え、〈L〉〈S〉を享受する一方で、〈D〉の問題を深刻に抱えていたようである。

第1節の文例2)で「エスプレッソのコーヒー沸かし器」を a shining steam pressure coffee machine と表現している箇所について言及したが、実はこの言い方はすべて Basic English の範疇に入る。a *shining steam pressure coffee machine* と表記すると分かりやすくなるが、steam と machine は Basic English 本体の850語中の語であり、他のイタリック体とした形容詞の *shining* は韻文用語、*pressure* は一般科学用語、*coffee* は国際語彙としてのそれぞれ Basic における + a 語である。さらに簡単にはこれは、a bright [brightly polished] Espresso coffee machine [maker] などとも Basic と言える。

前述したが、Hemingway は作品で飲食物について頻繁に語る。それもその固有名を出すことが多く、特別に味覚や嗅覚など五感を呼び覚ます書き方をする。しかしここではコーヒーの固有名の Espresso をあえて用いず、steam pressure (蒸気圧) によるコーヒー沸かし器そのものに、高ぶる感情が投射されていると解釈できよう。なお、スペイン語翻訳版ではこの部分は una reluciente cafetera exprés (= a bright espresso coffee pot) とされ、「蒸気圧」に相当する訳語は用いられてはいない。

あとがき

Hemingway の作品は簡素な文体である一方で、実はいわゆる文法的・語法的には緻密でもない。Solecism (破格) もあるし、米語というより伝統的イギリス英語の Archaism (古語用法) も多く現われる。Spelling (正字法) もイギリス風が多い。彼の作品は特に欧州を舞台にしたもので、大英帝国時代の匂いのする Bricicism (イギリス英語) を意識的に用いているようにも思われる。生粋のアメリカ語の語法を用いた文体でない点も、Hemingway 文学の1つの特徴ということになる。

また Vernacularism / Provincialism (土着方言)、Pleonasm (冗長表現)、Euphemism (婉曲語法) などもしばしば見られる。2文をピリオドなしで1文とすることもある。同一文中で人称・指示代名詞の he, his, him, they, their, them, it, this, that, etc. が重層的、対比的に用いられ、照応関係に一瞬迷うことにもなる。しばしば it, that の意味に含みがあり、何を指示するか熟考する必要も生じる。さらに、登場人物の固有名が意図的になかなか明かされず、サスペンス

の状態ともなる。

時制も同じ文脈で過去形と現在形が両用されたりし、視点が回ることがある。主格関係代名詞を1つの文中で複数個用いる文にも出くわす。一般的には句読点（コンマ）を付すところにもそれがないこともある。欧州各地を廻る紀行文学的な側面もあり、文中にスペイン語、イタリア語、フランス語などロマンス諸語やスワヒリ語など、外国語を原語のまま Loan word（借用語）として用いるいわゆる Xenism（外来語表記法）が多い。たとえば、本文中でも引き合いに出したスペイン内戦をテーマとした長編 *For Whom the Bell Tolls* 『誰（た）がために鐘は鳴る』（1940）などは、スペイン語風の英語語法の香りが多々感じられる。

さらに、粗野な響きをもつぞんざいな口調の Slanguage も多く、卑猥・卑俗な語がダッシュで伏せ字にすることなく、そのまま多用されもする。語が2つの意味をもち、一方は性的な意味を含蓄する Double entendre（二義表現）も用いる。broken な、その土地での Hybrid（混成語）で最低限に意味は通じる Pidgin English や Creole の範疇に入るものも用いられる。たとえば初出が1938年の短編 *The Denunciation* 「密告」などは相当量これが用いられている作品であるが、こういうものすべてが融合したものが Hemingway に特徴的な Rhetorical style（修辭的文体）と言える。実はこれが現実の英語の Usage（語法）でもあり、日本語の「べらんめえ」口調のような、粗野なくだけたスタイルにも慣れることが英語全体を手早く見る上で有益となる。

日本の E. Hemingway 研究は日本ヘミングウェイ協会（The Hemingway Society of Japan）が長年の研究を集大成した大判で、分厚く、超高価な『ヘミングウェイ大事典』（2012）を刊行した。これは Hemingway 作品に関するバイブル的存在の貴重な文献で、筆者はこれを宝物としているが、本稿では Basic を尺度とした Hemingway 作品の解釈意味学（Interpretive semantics of literary works by E. Hemingway）の手法として、独自に考えてみた。

Hemingway はしたたかな作家で、用いる語にも額面どおりとは別な、Symbolic meaning（象徴的意味）をしばしば潜ませる。たとえば本稿で引き合いに出した長編 *A Farewell to Arms* の題名中の arms も、「武器」の意味と、男性主人公の兵士 Henry が戦時下でほとんど性の対象にしか過ぎなかった愛人の女性主人公 Catherine の arms 「両腕」の意味を掛けたもの、という解釈もある。彼女の死とともに彼女の両腕（肉体）を捨てる、という象徴的意味となる。こういう点も意味解釈上で氷山理論的な不透明性の一端を感じさせるが、同時にそれが「言語明瞭／意味不明」、より正確には「終始、言語明瞭／結末、意味不明」の彼の作品が備えている魅力でもある。言語（英語）は明瞭でも、意味は深くて不明なところに味がある。

かつて日本の首相に常に言説が「言語明瞭／意味不明」だとして評判になった人があり、流行語のように使われたことも一時あったが、言語の意味不明の領域はやはり本来の Basic にも Wider Basic（拡張 Basic）にもならず、意味は不透明のままとなる。「言語明瞭／意味明瞭」こそ、そもそも Basic が備えもつ特性のはずであることを再確認しておきたい。

（日本ヘミングウェイ協会会員／日本メディア英語学会（旧日本時事英語学会）会員／本学会員／元名古屋市立大学教授）

参考文献

Alou, D. (2007) (Por la traducción al español) *Ernest Hemingway: Cuentos*. Random House, S. A.

- Flesch, R. (1949) *The Art of Readable Writing*. Macmillan Co, New York.
- 後藤 寛 (2014a) 「Intertextuality (間テキスト性) から考える Wider Basic English」 *Year Book* (No.66) pp.3-18. GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会
- 後藤 寛 (2014b) 『学び方を学ぶ 850 語プラス a の英語』 (*Learning English in the Basic Way*) 松柏社
- Hemingway, E. (1925) *In Our Time*. Chaps. XII, XIV In: *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. Scribner, New York. 1987.
- Hemingway, E. (1929) *A Farewell to Arms*. Scribner, New York.
- Hemingway, E. (1932) *Death in the Afternoon*. Scribner, New York.
- Hemingway, E. (1933) *A Clean, Well-Lighted Place*. In: *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. Scribner, New York. 1999.
- Hemingway, E. (1952) *The Old Man and the Sea*. Scribner, New York.
- 「ヘミングウェイ研究」 (*The Hemingway Review of Japan*. No.13.) (2011) 日本ヘミングウェイ協会編
- 今村楯夫／島村法夫・監修 (2012) 『ヘミングウェイ大事典』 勉誠出版
- The Bible in Basic English*. Cambridge Univ. Press, 1949.

◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2013年8月～2014年7月)

■ 2013年

8月14～16日	夏期英語教授法セミナー	オリンピック記念青少年総合センター	
9月28日	月例会	目黒区田道住区センター	
	デモ	keep (EP 1, 96)	服部 正子
	Basic	Basic English / 400 General より (p)	
10月26日	月例会	目黒区田道住区センター	
	デモ	seem (EP 2, 103)	加藤 准子
	Basic	Basic English / 400 General より (q, r)	
11月30～12月1日	秋のセミナー／月例会	青少年総合センター	
	デモ	who, which (rel.)	唐木田照代
	トーク	「新しい本のことなど」	相沢 佳子
12月21日	月例会	津田塾大学同窓会会議室	
	デモ	of (EP 1, 26)	中村 真子
	トーク	「基本語で楽しむ会話とリーディング」	黒瀬 るみ

■ 2014年

1月18日	月例会	目黒区田道住区センター	
	デモ	before (conj.) (EP 1, 46)	伴野 温子
	Basic	Basic English / 400 General より (r)	
2月8日	ベーシック・イングリッシュワークショップ／月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	“James Cook”	小林 由明
	デモ	“Other Men’s Houses (1)”	黒瀬 るみ
3月29日	月例会	港区三田いきいきプラザ	
	デモ	when (conj.) (EP 1, 72)	大野 晴美
	トーク	「Basic English の理論」	新井 等
4月26日	月例会	目黒区田道住区センター	
	デモ	There is, There are (EP 1, 37)	多羅 深雪
	トーク	「音の面白い話」	近藤ゆう子
5月17日	月例会	目黒区田道住区センター	
	デモ	We, You (pl.). They	前勝 和代
	Basic	Basic English / 400 General より (s)	
5月24～25日	GDM 発音ワークショップ	青少年総合センター	
6月21日	GDM 公開セミナー	すみだ産業会館	
	1) 1時間目をどう教えるか (I, You, He, She, It)		大野 晴美
	2) 動詞をどう教えるか (go を中心に)		中村 真子

7月26日	3) 関係詞をどう教えるか (whichを中心に) 月例会／総会 目黒区田道住区センター デモ see (EP 1, 41)	唐木田照代 伊藤千津子
-------	--	--------------------

◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2013年9月～2014年8月)

■ 2013年

9月29日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ① It is here / there. (EP 1, p.5) デモ② let (EP 2, p.15) Basic English 勉強会 International words について トーク Indonesian Batik (Bali's Dying way)	山崎 典子 此枝 洋子 片桐ユズル 松川 和子
10月19日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ in, on (EP 1, pp.11-12) Basic English 勉強会	上島 光代
11月30日	初級セミナー 弁天町市民学習センター	
12月16日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ① This / That his/her (EP 1, p.8 p.12) デモ② way (EP 2, pp.149-151) Basic English 勉強会 "Super-Frog Saves Tokyo" (村上春樹著) の Basic English 訳	麻田 暁枝 河村有里子

■ 2014年

1月27日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ① will be (EP 1, p.35) デモ② chief, touching (EP 2, p.105) Basic English 勉強会 「基本語で考える英文整序法／語配列の手順」 "Super-Frog Saves Tokyo" (村上春樹著) の Basic English 訳	山崎 典子 松川 和子
2月15日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ① of (EP 1, p.41) デモ② enough (EP 2, p.10) Basic English 勉強会 「基本語で考える英文整序法／語配列の手順」 "Super-Frog Saves Tokyo" (村上春樹著) の Basic English 訳	上島 光代 山崎 典子
3月15日, 16日	初級・中級セミナー IN KYOTO / 月例会 ザ・パレスサイドホテル (京都) デモ① 疑似関係詞 (EP 3, pp.12-15) デモ② 仮定法過去完了 (EP 3, p.47)	佐藤 正人 山田 静

4月19日	トーク 月例会 デモ① デモ②	「意味はどのように深まるか」 大阪市立総合生涯学習センター say (EP 1, p.42) what (relative) (EP 1, p.72)	片桐ユズル 麻田 暁枝 河村有里子
5月31日	“Super-Frog Saves Tokyo” (村上春樹著) の Basic English 訳 月例会 デモ① デモ② デモ③	大阪市立総合生涯学習センター I, You, He, She, It (EP 1, pp.1-2) This / That his / her (EP 1, pp.8-11) off-take (EP 1, p.14)	上島 光代 麻田 暁枝 山崎 典子
6月21日	Basic English 勉強会 GDM 初級一日セミナー	Basic restaurant 大阪市立総合生涯学習センター (1) 模擬：① I, You, He, She, It ② This / That his / her (2) 模擬授業 GDM の理論 (3) トレーニング (4) 模擬授業 (進んだところの授業として) : taking / took	片桐ユズル
7月27日	月例会・総会 デモ	大阪市立総合生涯学習センター do the most work (EP 2, p.135)	松川和子
8月11日～13日	西日本支部総会 夏期英語教授法セミナー	国立オリンピック記念青少年総合センター	

◆◆◆編集後記◆◆◆

今年も GDM 初級・中級セミナー in 京都 (3月14 & 15) が開催された。定員を超える参加者があり、熱気が溢れるセミナーであった。嬉しいことに、若い世代の人が多かった。

彼らは、オーラル重視の学習指導要領のもとで学習した世代であり、その中には、中・高時代に英語を教わった教員の指導法が脳裏に刷り込まれ、そこから抜け出そうとしている人もいただろう。教室ではオーラル重視の指導を実践するように求められるものの、効果的な指導法が見つからないで悶々とした日々を送っている人もいただろう。懇親会での会話を聞いていると、松浦克己さんの「匠の業の」指導を目の当たりにし、鱗が落ちるような感動を覚えて、セミナー参加を決めた人が複数名いた。彼らと同年代であった時代の私と、彼らと比較して、今は自分を恥じるばかりである。私は、若さの勢いを頼りに我流で授業をしていた。今年の8月のサマー・セミナーにも若い人が多く参加されることを期待したい。本号には、そのような若手の教師にとって示唆に富んだ報告が満載されている。



最後に、バランスをとる意味でも、Basic 関係の原稿がもっと多く寄稿されることを切望したく思う。

(伊達 民和)